

## 目次

はしがき .....	田辺 欧 1
------------	--------

### 第一部 北欧の詩

#### デンマーク・スウェーデン編

Henrik Nordbrandt の詩 .....	久木田奈穂 5
Marie Bregendahl の詩 .....	澤邊由美 9
Gustaf Munch Petersen の詩 .....	平井柚衣 14
Knud Sørensen の詩 .....	松原緋色 19
Yahya Hassan の詩 .....	神崎大智 24
Alberte Winding の詩 .....	久保田真由 29
Halfdan Rasmussen の詩 .....	里見 董 35
Henrik Nordbrandt の詩 .....	菊井彰乃 41
Jens Rosendal の詩 .....	藤原 希 46
N.F.S.Grundtvig の詩 .....	堀聖我 53
Gunnar Ekelöf の詩 .....	後藤秋音 57
Vilhelm Ekelund の詩 .....	佐伯育美 62
Verner von Heidenstam の詩 .....	水崎千尋 65
Gunnar Ekelöf の詩 .....	藤原 翠 69
Tomas Tranströmer の詩 .....	荒田憲助 72
Karin Boye の詩 .....	吉良美祐 75
Karin Boye の詩 .....	山口祐奈 79
Tomas Tranströmer の詩 .....	渡部和泉 85

### 第二部 卒業論文要約

#### デンマーク編

Forestillingen om et ukompliceret liv med en mand 『ある男との平凡な生活についての空想』 ～現代デンマークのミニマルな物語を読む～ .....	久保田真由 93
小説家、及び博物館員としての Peter Seeberg を探る .....	里見 董 96
21 世紀リアリズム文学として Bent Haller <i>Skyld</i> を読む .....	菊井彰乃 99
文化・芸術批評家としてのポウル・ヘニングスン — <i>Klingen</i> および <i>Kritisk Revy</i> での文筆活 動からみるデンマークモダニズムの幕開けと発展— .....	藤原 希 102
2 人の作家から読み解く北欧神話の変容性と現代的意義 .....	堀聖我 105

#### スウェーデン編

Astrid Lindgren : 『長くつ下のピッピ』 に描かれた子ども像を再考する .....	吉良美祐 111
Hjalmar Söderberg <i>Historietter</i> における表象としての「接吻」 ～同時代の作家・芸術と比較において～ .....	竹内あゆみ 114

ペール・ラーゲルクヴィスト『こびと』を読む	
一語り部“小人”を軸に一.....	山口祐奈 117
ムーミン一家の機能不全とその解決	
『ムーミンパパ海へいく』を通して.....	渡部和泉 120

## はしがき

田辺 欧

やっと 2020 年度が終わりを迎えようとしている。異例づくめだった今年度。誰もがこれまで体験したことのないパンデミックのせいで色々な制約のもと、新たな挑戦を次から次へと迫られる大変な年となった。ただ時間は淡々と流れ、大学での授業も途切れることなく続けられた。そういう意味では、一瞬にして多くのものが破壊され、停止せざるをえない大自然災害とはかなり違った。私たちはこの 1 年間、先の見えないことに対する不安にたえず脅かされつつも、少しずつその状況を受け入れる術を身につけていったのかもしれない。

ゼミの授業はこの 1 年を通して基本オンライン路線を貫いた。はじめはオンライン機器の使い方に戸惑うことも多かったが、次第にオンライン授業にも慣れていった。また第 1 期はキャンパスへの立ち入り自体が禁止されていたので、そのことへのストレスも大きかったかもしれないが、第 2 期になって対面がいくぶん緩和されるにつれ、逆にオンライン授業で手に入れた時間的なゆとりで懐かしさを覚えた人もいたのではないだろうか。

こうして私たちの誰もが、大なり小なり生活に不自由さを抱え、いつ収束するとも分からぬ状況に疲れを溜め、感染の不安に晒されながらも、こうした不測の事態を生き延びる力を徐々に育んでいけたのだとしたら、この 1 年も無駄ではなかったと思いたい。

実際にゼミにおける成果は例年よりもはるかに優れていた。家にいて本を読み予習に携わり、考える時間が普段より多かったからだろうか？ それとも 1 年間を通して言語別でゼミを分けたことが良かったからだろうか？ 理由はあれこれと考えられるが、一人ひとりが取り組んだ詩の訳業も、グループワークも、そしてその成果となるグループ発表も素晴らしかった。学生一人ひとりの士気の高さに感心した。そして何よりも感嘆したのが、4 年生の卒論への取り組み方だった。9 人すべての卒論執筆者の誰もが自らの卒論に対して実に真摯に向かい合っていた。行き届いたアドバイスができなかったにもかかわらず、立派な成果を出した 4 年生全員に対して、私は心から賛辞を送りたい。

今年のゼミ論集の編集作業は、今年度から博士前期課程に進み、スウェーデン文学の研究を続ける大鋸瑞穂さんが全面的に引き受けてくれた。大鋸さんは TA としても実に頼もしい存在だ。鷹揚な態度、的を射た適切なアドバイスで後輩から絶大な信頼を寄せられている。今号のゼミ論集の表紙はスウェーデン文学ゼミ 3 年生の水崎千尋さんが飾ってくれた。絵のなかの主人公は一人で机に向かう若い女性。窓のそとに見える光景と室内の様子、あたかもステイホームを余儀なくされることの多かった私たちの心象風景をどこか照らし出しているような感じがしてとても素敵だ。

お二人に心から感謝しています。本当にありがとう。



## 第一部

### 北欧の詩



## Henrik Nordbrandt の詩

久木田奈穂

### Punktum

### 終止符

Jeg er kommet til det punktum  
der hedder midsommer.  
Det der begyndte så godt  
slutter her.

真夏という名の  
終止符に来た。  
うまく始まったものは  
ここで終わる。

Det der slutter her, var det  
der begyndte så godt.  
Og det var alt.  
Og det er det, som står her.

ここで終わるのは、  
とてもうまく始まったもの。  
それはすべてだった。  
そして、それはここに綴るもの。

Det er som at være alene i verden  
og sige ordet ”hjem”.  
Det er som at høre sætningen  
„Din kæreste er død.”

それは世界にたったひとりで  
「わが家」と言うようなもの。  
それはフレーズを聞くようなもの  
「あなたの恋人は亡くなった」

Solen kan ikke forsvinde  
for der er ingenting at forsvinde fra.  
Når vinden blæser  
vender træerne det sorte ud af deres kroner.

太陽は消えることがない  
消えるものは何もないから。  
風が吹くと  
木は樹冠から黒い面を露わにする。

(出典 : *Pjaltefisk*, 2004)

(久木田奈穂 訳)

## 1. ノーブランドと『リーフィーシードラゴン』*Pjaltefisk*について

現代デンマークの作家、及び詩人であるヘンレク・ノーブランド(Henrik Nordbrandt)による本作は、彼が2004年に発表した詩集『リーフィーシードラゴン』*Pjaltefisk*より選出した一篇である。ノーブランドは1966年のデビュー作*Digte*をはじめとして詩人としてよく知られているが、ジャーナリズムや児童書、犯罪小説など、幅広いジャンルで活躍しており、2001年からは映画*På Ama'r*の脚本も手掛けている。彼は生、死、愛のような古典的なテーマを中心に扱う一方、彼自身を題材とすることや、言語や詩を問題とすること、さらにパラドックスを頻繁に使用するというモダニズムの作風もみられる。彼自身、影響を受けた作家として、アメリカの詩人Wallace Stevens (1879-1955)とスウェーデンの詩人Gunnar Ekelöf (1907-1968)の名を挙げている。

今回この詩集から「終止符」“Punktum”を選び、翻訳するに至ったのは、わかりやすく簡潔な言葉遣いでありながら、どこか影を感じさせる詩そのものの美しさと、真夏に夏の終わりと冬の訪れの予感を同時に感じ取る、北欧人らしい感性に惹かれたためである。本稿では、初めに*Pjaltefisk*の概要について簡単に触れた後、詩全体の構成及び単語レベルにおける分析を行い、この詩における一つの解釈を述べたい。

## 2. 『リーフィーシードラゴン』*Pjaltefisk*の概要について

‘*pjaltefisk*’とは、オーストラリアに生息する海水魚の1種で、和名のリーフィーシードラゴンは英名*Leafy sea dragon*を仮名書き表記したものである。タツノオトシゴと似た魚であるが、この種は周囲の海藻に擬態することを特徴とし、厳密にはタツノオトシゴ亜科ではなくヨウジウオ亜科に分類される。*Pjaltefisk*の表紙にも、黒い背景に映えるリーフィーシードラゴンの姿をみることができる。

さて、『リーフィーシードラゴン』*Pjaltefisk*は、40篇の詩からなる詩集である。言葉遣いやテーマは実にノーブランドらしく、不在と存在、愛、悲しみ、そして別れを扱っている。詩集全体で調和がとれており、各詩はその詩にとどまらず、より大きな空間へと展開する。詩には数多くの光と色が含まれ、光、闇、影、残光等を用いて効果的に表現される。なお、ノーブランドは通常、定型詩や押韻を使用しないが、*Pjaltefisk*には俳句が5篇、ソネットが1篇収められている。

## 3. “Punktum”の解釈について

“Punktum”について、1連目から順を追って分析していきたい。まず、本作のタイトルにもなっている“punktum”は、文章の末尾に打つピリオドや、点を指す言葉である。1連目からは、本作における“punktum”が真夏という瞬間、つまりその時を境に冬へと向かっていく転換点であり、さらに夏という光に満ちた輝かしい季節の絶頂点をも示しているこ



とが読み取れる。“punktum”の対訳については、1連目と2連目の「うまく始まったものがここで終わる」という表現から、終了を告げるものとしてのニュアンスを重視し、「終止符」とした。また、詩の出だしが“jeg”，つまり「私」で始まることから、この詩は主観的な筆致であると捉えた。この解釈に従い、2連目の“står”は、「存在する」という客観的な表現ではなく、「私’がここに綴る」という詠み人を感じさせる表現として訳した。このように、1・2連では、真夏を迎えてしまった「私」の夏を惜しむ心情が、簡潔な言葉づかいでドラマティックに表現されている。続く3連目は、夏が過ぎ去ることへの思いを孤独の悲しみ、心細さに喩えるユーモラスな表現がなされている。最後の4連目では、それまでと少し雰囲気が変わり、どこか哲学的なものを感じさせる。前半の「太陽は消えることがない」の部分は、北欧の夏を彩る太陽が取り上げられており、「私」の夏への強い思いが感じられる。4連目の後半部分もまた、解釈が難しい。“vende ud”とは、服をひっくり返す時のように、内側のものを表出させる際に使われる表現である。このことから、木が隠れていた自らの黒い部分を露わにすることを示していると解釈した。ここでの「黒」とは、近づいてくる冬や、冬が持つ死のイメージなども連想させうるものである。風が吹く度に冬が近づき、寒さだけでなく寂しさや心細さが増し、生命の生き生きとした輝きが失われていくことへの悲しみが込められている。または、夏が終わり冬へ近づくと季節の流れに抵抗を試みる生命の象徴として、木を捉えることも可能であろう。3、4連目の「私」の冬にまつわる喪失感や孤独への嘆きは、「うまく始まり、すべてであった」夏への称賛をある意味、逆説的に強く印象付ける働きを持っているのではないだろうか。

#### 4. まとめ — “Punktum”

北欧の人々にとって、夏が特別な意味を持つ季節だということはよく知られている。そこには様々な文化・社会・宗教的背景が関係するが、長く暗い冬をもつ北欧の人々にとって、心身ともに解放される夏が特別好まれるのは想像に難くない。“punktum”は、真夏を迎えた瞬間の、夏への賛美と来る冬への憂いの混じる複雑な心境を、簡潔な言葉遣いで爽やかに表現している。このテーマに、デンマーク性というものに向き合い続けるノーブランドらしさを読み解くこともできよう。ユーモラスで軽やかな響きでありながら、ふとシリアスで憂鬱な気配を覗かせるこの短い詩は、何度も繰り返し味わうことでさらに真価を発揮する、奥深い作品ではないだろうか。

#### 使用テキスト

Nordbrandt, Henrik. 2004. *Pjaltefisk: digte*. København: Gyldendal.

インターネット上の資料

forfatterweb. Henrik Nordbrandt.

<https://forfatterweb.dk/oversigt/nordbrandt-henrik> (2020年8月18日最終確認)

Litteratursiden. Anmeldelse Pjaltefisk af Henrik Nordbrandt.

<https://litteratursiden.dk/anmeldelser/pjaltefisk-af-henrik-nordbrandt> (2020年8月18日最終確認)

ナショナルジオグラフィック. リーフイーシードラゴンとウィーディーシードラゴン.

<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/20141218/429072/> (2020年8月18日最終確認)

J E G K U N D E I K K E S O V E –

Saa svandt den da, den Nat saa lang;  
jeg kunde ikke sove.

Jeg syntes, Stuen var saa trang,  
urolig var jeg Natten lang,  
jeg vendte mig saa mangen Gang  
og kunde ikke sove.

Thi der er En, jeg har saa kær,  
at det kan ikke siges.  
Han synes mig min Elskov værd,  
saa køn og fin og klog, at hver,  
som ser ham, de maa faa ham kær,  
– mer kær, end det kan siges.

Men han var syg og feberhed,  
da sidste Gang jeg saa ham.  
Hans Øjne sa' mig, at han led,  
hans Lidelser, mer end han ved,  
mig bittert i mit Hjerte sved,  
da sidste Gang jeg saa' ham.

Som da, i Nat jeg saa' ham pint,  
og kunde ikke sove.  
Hvergang jeg vilde slumre ind,  
jeg saa' hans Ansigt kært og fint,  
saa lidende og saa forpint,  
– og kunde ikke sove.

I Uvejrsfyl, i Tordenbrag,  
– endda saa kan jeg sove.  
Men ved jeg, at du ligger syg  
og pint i din Alkove,  
da kan jeg ikke sove.

眠れなかったー

夜が更けた，とても長い夜が  
眠れなかった。  
部屋がとても窮屈に感じて  
一晩中心配で  
何度も寝返りをうって  
眠れなかった。

愛するひとがいるから  
言葉では言えないほどに  
彼は私が愛するのも無理ないほどに  
魅力的でかっこよくて，賢くて  
彼を見た人はみんな好きになってしまう  
ー言葉で言い表すよりも，もっと愛しく

でも彼に最後に会ったとき  
彼は病気で熱があった。  
彼の目が私に苦しいと訴える  
彼の苦しみは，彼が思う以上に  
私の胸を焦がし痛めつけた  
彼に最後に会ったとき

彼が苦しんでいるのを見た夜  
眠れなかった。  
微睡みの淵に立つたび  
彼の愛しい，整った顔が浮かんだ  
ひどく苦しそうで，辛そうな顔が  
ー眠れなかった。

風がうなっているのでも，雷鳴が響いているのでも  
ーそれでも眠れるのに。  
でもあなたが病気だ，と  
アルコールベッドの中で苦しんでいる，と知ったら  
そしたら眠れないの。

(出典： *Filtret Høst*, 1937)  
(澤邊由美 訳)

## 1. 作者紹介：Marie Bregendahl (1867-1940)

1867年にユラン島北西部の田舎町、Flyに生まれる。12歳の頃に母を亡くし、長女であったMarieはその後、家事や妹の面倒を見ることに追われる生活を送る。Marieが作家としての道を歩むこととなったのは、19歳の頃に一年間通ったVrigsted Højskoleが大きく影響しているだろう。彼女はここで、後に国民的詩人となるJeppe Aakjærと出会い、26歳で結婚。結婚生活は七年足らずで破綻したが、Aakjærの手助けもあり1902年に「ラース仕立て屋の病床より」“Ved Lars Skædders Sygeseng”にてデビュー。1912年、45歳で代表作である『死の夜』*En Dødsnat*を出版。小説では、田舎に住む人々を主人公に、彼らの視点から見た農民の労働環境や政治的参画、女性の固定化された役割に対する批判を主に描く。1940年、72歳でコペンハーゲンにて死没。

## 2. 作品紹介

本詩は、1937年に発表された『多彩な収穫』*Filtret Høst*に収録されているものである。本作は小説がメインであった彼女の作品の中で唯一の詩集であり、書籍名からも読み取れるようにMarieがこれまで40年間に渡る作家人生の中で感じてきた想いを全て詰め込んだ作品であるといわれている。それを表すかのように、作品内の詩は自然、季節、男女間の愛、親子間の愛、など様々なテーマに富んでいることが特徴的である。さらに、本書は移り変わる季節の詩、男女間の詩、親子の詩、変革の詩、家族の墓での詩という順番で記載されており、まるで人生そのものをそのまま映し出したかのような構成となっている。また、*Høst*には「秋」という意味(DEN DANSKE ORDBOG “høst” 2より)もあり、人生における秋、つまりは晩年を暗に示していると考えられる。亡くなるわずか三年前に発表された本作は、まさにMarie自身が死期を悟り、これまでの人生を振り返るような想いで著された作品だといえよう。

## 3. 解釈

本詩は詩において通常多く用いられるメタファーが全く用いられず、感情そのものをストレートに表現することで若い頃に誰もが一度は抱くだろう淡い恋心を巧みに表現している。Marieは前述したように思春期の大部分を家事に捧げざるを得なかったため、その分、心の高揚は人よりも大きかったに違いない。しかしながら、Aakjærとの結婚生活は、彼女にとっては子供の頃、ひいては女性の固定化された役割や立場の弱さ、古い慣習の残る「田舎」というものを彷彿とさせるものだったと考えられる。彼女がコペンハーゲンへと移り住み、生涯コペンハ

一ゲンで暮らしたことからは田舎への嫌悪が見て取れ、彼女が感じた絶望の深さが窺える。本詩は、恋、そして結婚生活への憧れと現実とのギャップに強い悲しみを覚えた Marie が、晩年に差し掛かり、もう一度あの頃の甘酸っぱい恋心を思い出したいという願望のもと執筆したものではないだろうか。

#### 4. 構造分析

本詩は一般的な詩の構造と比べ、三点の構造的特徴がみられる。なお、原文掲載ならびに翻訳に際しなるべく元の形に近い形式になるよう改行や語の数に配慮した。まず一点目として、タイトルである“JEG KUNDE IKKE SOVE –(眠れなかった–)”は一文字ごとにスペースが取られ、全て大文字で表されている。次に、一連目を除くすべての連において、二行目及び最終行目は数文字下げて始められ、“–”が多く用いられている。さらに、各連を注意してみると韻が踏まれていることがわかる。一連目を例に挙げると一行目は“lang(長い)”，二行目“sove(眠る)”，三行目“tran(窮屈な)”，四行目“lang(長い)”，五行目“Gang(何度も)”，六行目“sove(眠る)”となっており、二行目と最終行目が同じ韻、他の行がもう一つの韻で統一され、abaaabの形態をとるリズムが全ての連に共通している。この三点により、詩中で彼女が感じている夜の重々しさや永遠に終わらないかのような長さが表現され、それにより彼女が向き合う恋の甘酸っぱさや悶々とした感情、彼女の中で恋というものが占める大きさを示唆する効果もたらされている。ここから、詩中の彼女がまだ思春期の「少女」であることが明らかとなるであろう。また、リズムカルさを与えている韻や数文字下げて表記された形式は、読者に余韻を与えるとともに夜の静けさや若い頃の恋に対する懐古の念を抱きやすくしているのだ。

#### 5. まとめ

誰もが一度は抱く恋の甘酸っぱさ。それをこうもストレートに、そして丁寧に表現している本詩からは、恋に対する高揚感と共に、幼い年相応の暮らしを長らく送ることが出来なかった過去が窺える。本詩を読んだ後に彼女の他の作品を読むと、より一層、彼女が感じた女性が押し付けられてきた役割というものに対する憤りが浮き彫りとなるであろう。

インターネット上の資料

Kalliope digter. Marie Bregendahl, “JEG KUNDE IKKE SOVE –”.  
<https://kalliope.org/da/text/bregendahl2017091514> (2020年8月2日最終確認)

Litteratursiden. *Marie Bregendahl*.

<https://litteratursiden.dk/forfattere/marie-bregendahl> (2020 年 8 月 2 日最終確認)

Forfatterweb Bibliotek og undervisning. *Marie Bregendahl*.

<https://forfatterweb.dk/oversigt/bregendahl-marie> (2020 年 8 月 2 日最終確認)

Bog&idé. *Marie Bregendahl*, “Filtret Høst”.

<https://www.bog-ide.dk/produkt/391367/marie-bregendahl-filtret-hoest#!> (2020 年 8 月 2 日最終確認)

for sent

gennem denne nat  
hører jeg  
dronningens øjne kalde -

men dronningen sover  
blandt palmevinde -  
det er kun  
hendes øjne, der kalder -

dronningen har ikke mere  
brug for mig -  
det er mig, der behøver  
hende -

let at finde sydens maane -  
men jeg har ødelagt min elskov -  
den er ikke mere til at stole paa -  
men jeg vil sende min maage

som en hvid streg  
den, som er tilbage -  
og haabe alt -

for  
gennem denne nat  
hører jeg  
dronningens øjne kalde -

dronningen kalder jo ikke -  
det er mig, der behøver  
hende -



遅かった

夜を通して  
私の耳に届いている  
女王の眼の呼びかけがー

いや、女王は眠っている  
シュロの木に巻かれてー  
それはただ  
呼びかける彼女の眼ー

女王はもうこれ以上  
私を必要としないー  
求めているのは私、  
彼女のことをー

南の月は難なく見つけられるー  
けれど私はエロスを打ち壊したー  
エロスはもはや信じられないー  
けれど私のカモメを遣わそう

白い線を描いて  
私のもとに帰ってくるー  
全てを願ってー

なぜなら  
夜を通して  
私の耳に届いているから  
女王の眼の呼びかけがー

女王が呼びかけることなどないー  
求めているのは私、  
彼女のことをー

(出典 : *det underste land*, 1933)

(平井柚衣 訳)

## 1. 作者紹介：Gustaf Munch-Petersen (1912-1938)

Gustaf Munch-Petersen は、1912年に教授職の父と准教授職の母のもとに誕生した。自由主義的でアカデミックな環境で幼少期を過ごす。彼はその環境に馴染むことができなかった。彼は探究心が強く、漁師やグリーンランドの鉱山採掘士として働きながら複数のことを学び、その経験が彼の文学に大きな影響をもたらすこととなった。しかし、母からの熱心かつ議論的口調の手紙は彼に重くのしかかり、両親の期待に応えられない自分への葛藤を抱え、自己のアイデンティティーを探していた。そのような思いは、1932年出版の処女作 *det nøgne menneske* 『裸の人間』の中で “til mine forældre” 「両親へ」というタイトルの詩に描かれている。26歳の時には、妻と子供を残してスペイン内戦に義勇兵として参戦し、命を落とした。

Gustaf Munch-Petersen の実験的な作風は自伝的要素の強い作品に大いに現れている。また彼はシュールレアリズムの画家としても活躍した。彼の作品は象徴的であり、偽りの現実を明らかにし、より確かな何かに到達すること求めている。

## 2. 作品紹介

彼の詩は、大文字を使用せず、ピリオドの代わりに-(ダッシュ)を用いるという一貫したスタイルで書かれ、自らの名前でさえも小文字の表記とした。

本詩は1933年に出版された詩集 *det underste land* 『地下の国』に収録されている詩の一つである。前年に発表された *det nøgne menneske* 『裸の人間』では、解放への強い思いと物事をより良くしたいという衝動を抱えた若者が現れている。そして二作目の *det underste land* 『地下の国』では、前作に憧れや切望が加わった。彼は人間に自由をもたらすことを願い、我々の未知数の自己への変貌を望んだ。

*det underste land* 『地下の国』は二部から構成されている。本詩が収録されている第一部は、魅力的で魅惑的なトーンでキリスト教神話を主題として書かれたものも多くある。

## 3. 詩の解釈

ここでは、詩にちりばめられたモチーフから描かれる情景に着目して分析していく。

### 3.1. “maane” と “maage” から読み取る情景

第4連に出てくるモチーフは “mane” と “maage” である。“mane” は月の意味であり、“maage” はカモメを意味する。カモメは海岸や河口、港といった海辺に生息する鳥であることから、この場面の情景は夜の海または海辺であることが窺える。

そのような月の輝きが届く中で作者は、“men jeg har ødelagt min elskov-”と語る。なぜ“men”、つまり「しかし」なのか。前行と繋げて考えると、月は見上げればそこにあるにも関わらず、“min elskov”＝情熱や美しいものに惹かれるエロスを壊してしまった。すなわち、美しいもの（ここでは外見的な美しさだけではなく、崇高性や神秘性を含む）がそばにあるが、それを美しいと思うことが出来なくなったと解釈できる。そして、第4行と第5連では、カモメが希望を乗せて白い線を描いて帰ってくることを望んでいる。闇夜に白い線は映えるものであり、エロスを失った自分を導く道筋として描かれているのではないだろうか。

以上第4連・第5連から読み取れることは、美への導きを必要とする自分と、美を認知するエロスを破壊した自分という矛盾を描いていると考えられる。

### 3.2. “palmevinde” の意味

この単語は“palme”＝シュロと“at vinde”＝巻く、を組み合わせた造語である。シュロはヤシ科の常緑樹であり、また、耐寒性、耐火性、耐潮性も備えている。そのような特徴を持つシュロに女王が巻かれているということが意味するのは、場所や季節もしくは時間に関係なく存在する強力な存在としての女王と言える。

またシュロは初期キリスト教絵画において殉教のモチーフとして描かれる。このことから、女王の不可侵性や崇高性が表現されていると考えることもできる。

### 3.3. “dronningen” が意味するもの

“dronningen”は女王の意味である。女王という単語からイメージできることは、統治者という側面に注目した場合には権力、抗えない存在などがあり、その他には高貴な存在なども挙げられる。本詩においても女王は複数の意味を持つものとして捉えることができる。

詩の中で、作者は女王の目の呼びかけを耳にしているにも関わらず、彼女は眠っているために呼びかけるはずがないと否定する。この構造は、第4連・第5連との類似性を持っている。すなわち、呼びかける女王＝美を求める自分、呼びかけの否定＝エロスの破壊である。また、この構造そのものが、屈服せざるを得ないものの存在を暗に示しているとも捉えることができる。また、2.2.の解釈を考慮すると、それが神聖不可侵であると作者が捉えていると考えることができる。そして、第3連と第7連で女王はこれ以上自分を必要とはしておらず、女王のふりをしていただけの自分であることに気がつく。これが意味することは、自己矛盾への気づきであり、本来の自分・美を求める自分への回帰と考えることができる。

#### 4. まとめ

以上のように，“for sent”は自己矛盾とそれに対する気づき，抗えない思いへの追従をうたった詩である。一見，平易な言葉でよまれた詩であるが，自身を深く見つめた Gustaf Munch-Petersen の厳しくも力強い洞察が反映されていると言える。また，1 人の人間としての自己を省みることを通して，人間全体への思索を巡らし，社会へ警鐘を鳴らしたのではないだろうか。

#### インターネット上の資料

Kalliope. *Gustaf Munch-Petersen, "for sent"*.

<https://kalliope.org/da/text/munchp20170923200> (2020 年 7 月 29 日最終確認)

Forfatterweb. *Gustaf Munch-Petersen*.

<https://forfatterweb.dk/oversigt/munch-petersen-gustaf> (2020 年 7 月 29 日最終確認)

Litteratursiden. *Gustaf Munch-Petersen, det underste land*.

<https://litteratursiden.dk/analyser/munch-petersen-gustaf-det-underste-land> (2020 年 7 月 29 日最終確認)

Howtogetrid. *Måge - beskrivelse, habitat, interessante fakta*.

<https://howtogetrid-da.expertexpro.com/ozernaya-chajka-opisanie-sreda-obitaniya-interesnye-fakty/> (2020 年 7 月 29 日最終確認)

Wikiped. 「シュロ」.

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%AD> (2020 年 7 月 29 日最終確認)

Morgen

Nattens lagner  
ligger endnu over huset,  
tunge og grå af ælde.  
Som en fjern anemone  
bryder morgenen frem  
i vore øjne.

Endnu er vi  
tunge af flygtende drømme,  
endnu er vi  
uden for al virkelighed,  
nyfødte, genfødte  
med morgenens ynde  
i stive knæ.

Endnu ingen virkelighed  
ingen angst  
ingen lykke,  
kun et nøgent trin  
i det sekund  
alting bliver til.

Som en fjern anemone  
I vore øjne.

## 朝

夜の帳が  
まだ家を覆っている、  
古びてしまって重く、灰色に。  
遠くのアネモネのように  
朝が始まる  
私たちの目には見える。

まだ私たちは  
消えてしまうような夢をひきずり、  
まだ私たちは  
すべての現実の外側で  
生まれたばかりだ、生まれ変わった  
朝の心地よさで  
おぼつかない足取りで。

まだ現実はない  
恐怖もなく  
喜びもなく、  
ただ一步を踏み出したばかりで  
その瞬間  
すべてが生まれる。

遠くのアネモネのように  
私たちの目には見える。

(出典： *Naturligvis*, 1952)

(松原緋色 訳)

## 1. 『小麦』 *Hvedekorn* とサアアンスンについて

『小麦』 *Hvedekorn* は 1920 年から Rosinante & Co が発行している文学雑誌である。しかし誌名は度々変わっており、1920~21 年は『ムギセンノウ』 *Klinter*, 1925-28 年は『若者のデンマーク文学』 *Ung Dansk Litteratur*, 1930-52 は『野生の小麦』 *Vild Hvede*, 1952-『小麦』 *Hvedekorn* と変遷した。本誌は長年詩人のデビューを目的としており、実際に多くの有名なデンマーク詩人が本誌でデビューしている。クヌーズ・サアアンスン(Knud Sørensen, 1928-)もその一人であり、1952 年に「朝」“Morgen”で作家デビューを果たした。当時の編集者はデンマークの国民的詩人として知られるハルフダン・ラスムスン(Halvdan Rasmussen, 1915-2002)だった。

本稿では、サアアンスンのデビュー作である「朝」に関して、サアアンスンの背景との関わり、描写している情景、詩の中に登場するアネモネ *Anemone* について考察していきたい。

## 2. サアアンスンの生い立ち、及び “Morgen” の分析

サアアンスは 1928 年に Hjørring で鉄道長の息子として生まれた。1952 年には測量士の資格を得て、1958 年から 1985 年にかけて Mors で公認測量士として働き、現在も Mors に住んでいる。この Mors での農村生活が作家としての彼自身に大きく影響を与えており、作品中にも農民や農村改革から文化的景観の歴史についての描写が特徴的に表れている。彼は詩や散文だけでなく伝記やラジオの脚本なども手掛けている。

“Morgen”にも農村生活から影響を受けたサアアンスンならではの情景描写がなされている。一連目は長年住んでいる家の上に広がる夜はなかなか明けないが、遠くにあるアネモネがぼんやり見えるように、ぼんやりと朝が始まるという光景を描いている。アネモネについては次項で詳しく説明するが、森に見られる花であることから、この場面は自然に囲まれた農村であることが読み取れる。二、三連目はまだ夢が覚め切らずぼんやりとしている中で、ベッドから起き上がりふらふらと一歩を踏み出した瞬間に朝を感じる、ということを描いているのではないだろうか。「現実の外側」とはつまり夢の中を表しているので、夢が覚めやらぬ状況で現実と夢の間で朝を迎える様子を描いている。夜から朝に移り変わり夢から現実の世界に移行する中で、意識も変容することを表現している。この詩が収録されている詩集の『当然のことに』 *Naturligvis* という表題からも考えられるように、本詩には夢が覚め切らない状態で朝を迎えるという、誰もが「当然のように」体験する日常が描かれており、その点からも自然に密着した農村生活で培ったサアアンスンの観察眼が、作品をつくるにあたっての情景描写や場面の切り取

り方に影響を与えているとわかる。

### 3. Anemone の表象について

ここではアネモネがどのような意味をこの詩に与えているかについて考察する。まずデンマークにおけるアネモネは一般的に白いアネモネを指し、落葉樹林などの森において春を告げる存在として知られている。斜面などにもよく見られ、すぐに根を広げて辺り一面を白い花で覆いつくしてしまう。

このことから、“Morgen”を考察するにあたって「春」はキーワードの一つになると考える。遠くに春を告げるアネモネが見えるように、ぼんやりと朝がやってきたのを感じるということを示すためにアネモネを登場させたのではないだろうか。深い落葉樹林の中で白いアネモネが遠くに見え春を感じる様子と、暗い灰色の夜に朝の気配という希望が感じ取られる様子を重ねたのではないだろうか。朝の夢が覚め切らず頭がぼんやりしているときに見た朝の気配、恐らく太陽の光が、暗い中に咲く白いアネモネと重なって見えて、夢か現かはっきりしない状況をこの比喻によって表していると考えられる。

つまりアネモネは、なかなか明けない夜にとっての希望である朝と、暗い落葉樹林にとっての希望である春を重ね合わせ、朝の喜びを強調する役割を果たしている。

### 4. まとめー農村生活での“Morgen”

日常の一場面を切り取ったこの詩の特徴は2点ある。一つは夜と朝、夢と現実それぞれが混ざり合い移り変わる様子を謳っている部分である。長らく明けない夜の中に見えてくる朝と、ベッドから一步踏み出して感じる現実、この二つの対比がこの詩の美しい部分である。また二つ目は、朝とアネモネを重ね合わせる表現である。農村生活で自然に対する観察眼を培ったサアアンスンならではの視点であると考えられる。夜と朝、夢と現実、遠くに見えるアネモネのこの3要素が重なり合って、朝の気だるさと明るさを表現している詩であると言えるのではないだろうか。

使用テキスト

Knud Sørensen. 2009. *Naturligvis*. København: Gyldendal.

インターネット上の資料

Knud Sørensen-Forfatterweb. <https://forfatterweb.dk/oversigt/zsorensen00> (2020年8月)



月 3 日最終確認)

Knud Sørensen (forfatter)-Wikipedia.

[https://da.wikipedia.org/wiki/Knud\\_S%C3%B8rensen\\_\(forfatter\)](https://da.wikipedia.org/wiki/Knud_S%C3%B8rensen_(forfatter)) (2020 年 8 月 3 日最終確認)

Hvedekorn, en plads for digterne-Arbejderen.

<https://arbejderen.dk/anmeldelse/hvedekorn-en-plads-digterne> (2020 年 8 月 3 日最終確認)

Hvedekorn (tidsskrift)-Wikipedia.

[https://da.wikipedia.org/wiki/Hvedekorn\\_\(tidsskrift\)](https://da.wikipedia.org/wiki/Hvedekorn_(tidsskrift)) (2020 年 8 月 3 日最終確認)

Halfdan Rasmussen-Wikipedia.

[https://en.wikipedia.org/wiki/Halfdan\\_Rasmussen](https://en.wikipedia.org/wiki/Halfdan_Rasmussen) (2020 年 8 月 3 日最終確認)

Hvid anemone.

<https://mst.dk/friluftsliv/undervisning/undervisningsmaterialer/danmarks-natur/urter/hvid-anemone/> (2020 年 8 月 3 日最終確認)

BARNDOM

FEM BØRN PÅ RÆKKE OG EN FAR MED EN KØLLE  
FLERGRÆDERI OG EN PØL AF PIS  
VI STIKKER SKIFTEVIS EN HÅND FREM  
FOR FORUDSIGELIGHEDENS SKYLD  
DEN DER LYD NÅR SLAGENE RAMMER  
SØSTER DER HOPPER SÅ HURTIGT  
FRA DEN ENE FOD TIL DEN ANDEN  
PISSET ER ET VANDFALD NED AD HENDES BEN  
FØRST DEN ENE HÅND FREM SÅ DEN ANDEN  
GÅR DER FOR LANG TID RAMMER SLAGENE VILKÅRLIGT  
ET SLAG ET SKRIG ET TAL 30 ELLER 40 TIL TIDER 50  
OG ET SIDSTE SLAG I RØVEN PÅ VEJ UD AD DØREN  
HAN TAGER BROR I SKULDRENE RETTER HAM OP  
FORTSÆTTER MED AT SLÅ OG TÆLLE  
JEG KIGGER NED OG VENTER PÅ DET BLIVER MIN TUR  
MOR SMADRER TALLERKENER I OPGANGEN  
SAMTIDIG MED AT AL JAZEERA TV-TRANSMITTERER  
HYPERAKTIVE BULLDOZERE OG FORTØRNEDE KROPSDELE  
GAZASTRIBEN I SOLSKIN  
FLAG BLIVER BRÆNDT  
HVIS EN ZIONIST IKKE ANERKENDER VORES EKSISTENS  
HVIS VI OVERHOVEDET EKSISTERER  
NÅR VI HIKSTER ANGSTEN OG SMERTEN  
NÅR VI SNAPPER EFTER VEJRET ELLER MENINGEN  
I SKOLEN MÅ VI IKKE TALE ARABISK  
DERHJEMME MÅ VI IKKE TALE DANSK  
ET SLAG ET SKRIG ET TAL

## 子供時代

列になる5人の子と棍棒を持った父  
多くの泣き声と小便の溜まり  
俺たちは交代で手を突き出す  
どうすればいいかわかっているから  
撲る度になる音  
妹が勢いよく跳ね飛ぶ  
片方の足からもう片方の足へと  
小便は滝のごとく彼女の足を伝い落ちる  
片方の手 そしてもう片方の手と  
長い時間に渡り好き放題殴られ続ける  
殴打 叫び 数字 30か40時には50  
そして最後は玄関に向かってケツにひと蹴り  
あいつは弟の肩を掴んで立たせ直し  
殴打とカウントを続ける  
俺は俯き 俺の番になるのを待つ  
母さんは階段の踊り場で皿を砕いている  
そんな中アルジャジーラがテレビ放送されている  
盛んに動き回るブルドーザー、隅々まで憤怒に満ちた身体  
晴天下のガザ地区  
旗は燃やされている  
もしシオニストが俺たちの存在を認めなかったら  
もし俺たちがそもそも存在していたとしても  
俺たちが恐怖と痛みでむせび泣いているときに  
俺たちが喘ぎ 存在意義を必死で求めるときに  
学校で俺たちはアラビア語を話してはならない  
家で俺たちはデンマーク語を話してはならない  
殴打 叫び 数字

(出典：YAHYA HASSAN, 2013)

(神崎大智 訳)

## 1. 作者紹介：Yahya Hassan (1995-2020)

Yahya Hassan は 1995 年デンマーク第二の都市、オーフースで移民二世として生まれる。両親は 80 年代後半にデンマークにレバノンからのパレスチナ人移民である。Hassan を含め兄弟姉妹たちは、父親から日常的に暴力を振るわれていた。また 13 歳の頃から犯罪を繰り返し、一時的に拘留されるなどするが、北ユランのとある保護施設 *døgninstitution* にいたときに、1 人の先生が Hassan のものを書くことへの関心に気づき、文学に関わる道を紹介する。この出来事が、Hassan が詩人になるきっかけとなり、2013 年に詩集 *Yahya Hassan* でデビュー。2019 年 11 月に *Yahya Hassan 2* を出版するも、これが詩集としては遺作となる。2020 年 4 月 29 日、24 歳という若さで死去。

## 2. 作品解釈・訳について

Yahya Hassan のデビュー作である詩集、*Yahya Hassan* (2013) に収録されている“BARNDOM”は、作者紹介でも述べたとおり、彼が兄弟姉妹とともに父親から日常的に暴力を振るわれていた経験とそのとき抱いていた感情を描いている。この詩を日本語に訳していく過程でまず考慮したのは彼の詩に溢れている怒りと心の叫びをどう表現するかである。彼の詩はすべて大文字で記されている。文章や単語の全てを大文字で何かを記すという表現は、何かを訴えたり、怒りや興奮などの何か強い感情を表したりする際に用いられることが多い。わかりやすい例を挙げると、世界各地で起こるデモで掲げられるプラカードやポスター、あるいはトランプ大統領の SNS での過激な投稿などは大文字のみで書かれているのをよく目にする。

Yahya Hassan のこの“BARNDOM”という詩に読み取ることができる彼の怒りと心の叫びを、大文字小文字の区別のない日本語に置き換えるにあたって、一人称“JEG”を「僕」とするか「俺」とするかが重要であると考えた。この詩は子供時代の彼の視点で描かれている。つまり語り手は子供の頃の Hassan 自身なのである。その点を考慮すると、子供らしさを表現するには「僕」の方が適切であろう。しかし、この詩を実際に書いたのは、子供時代の自分を振り返る当時 17 歳の Hassan である。そして彼が朗読する映像を見ると、父親から暴力を振るわれ、移民二世という出自が原因で経験してきた苦しみを子供の頃の彼があたかも読んでいるというよりは、むしろ成長した彼がその場で溢れる感情を言葉にしたような印象を受ける。これらの点を考慮すると、「僕」という言葉でこの詩の“JEG”を表現するには優しい印象を与えすぎると判断し、よりきつい印象を与える「俺」という言葉の方が適切と判断した。

また以下にこの詩を訳す際に、意識をした箇所について解説していく。

・ 4 行目 “FOR FORUDSIGELIGHEDENS SKYLD”

“FORUDSIGELIGHEDEN”には「予見（予知）されたこと」という意味の派生で、「経過や話がいつものパターンに従い、期待通りかついかなる驚きも含まれないように展開される様」という意味がある。

また、Hassan のバックグラウンドを調べると、彼を含めた兄弟姉妹たちに関して、“Søskendeflokken blev systematisk udsat for voldelige overgreb af en far”（「兄弟姉妹たちは父からの計画的で暴力的な虐待の危険にさらされていた」とあり、詩においてもHassan は自分の番が回ってくるのをなんの疑問もなく待っていることがわかる。また“FOR～SKYLD”で「～のために」という意味となることを考慮すると、彼らは父から暴力を振るわれることに慣れてしまい、自分の番が回ってきたときに、どのように立ち振る舞えばいいのか予めわかっているのだろう。そのために、彼らは、「どうすればいいかわかっているから」、自ら交代で手を突き出しているのだ。

・ 18 行目 “KROPSDELE”

「身体部分」が直訳だが、直前の “FORTØRNEDE” 「怒り狂った」を考慮し、テレビで流れる様々な人々の身体のあらゆる部分が怒りに満ちて子供の頃の Hassan の目にうつったという意味を含んでいると読み取り、「身体部位」ではなく「隅々まで憤怒に満ちた身体」という訳にした。

・ 24 行目 “SNAPPER EFTER MENINGEN”

“MENINGEN”は直前の存在することの意味として解釈。また“snappe efter vejret”「息を切らす、喘ぐ」というイディオムから、必死で何かを求めている意味で、目的語の“MENINGEN”に対し、“SNAPPER EFTER”を使用していると考え、「存在意義を必死で求めるときに」と訳した。

### 3. まとめ

“BARNDOM”は表現が詩的で解釈しづらいために訳す際に苦労するような詩ではないだろう。むしろ彼の経験を描写している言葉はわかりやすく、表現が直接的なものが多い。それゆえに当時彼が抱いていた感情が痛いほどに生々しく読者に伝わるのだ。

偶然にもこの詩を訳すと決めた数日後に彼はこの世を去ってしまった。24歳という早すぎる死だが、その短い人生において家庭環境や移民二世という出自を原因とした様々な苦しみを味わってきたのだろう。彼の新しい作品が世に出されることはもうなくなってしまうが、彼が残した作品には、私たち日本人には想像することが難しい、しかし目を逸らしてはいけないグローバル社会、もしくは格差社会の現実なるものを感じられ

る要素が多く詰まっていると思われる。

私が訳した“BARNDOM”をきっかけに1人でも多くの人に関心が今は亡き彼の作品へ向けられたら幸いである。

インターネット資料

*Yahya Hassan*, forfatterweb. <http://forfatterweb.dk/oversigt/hassan-yahya>

*Yahya Hassans Digte – Aalborg Teater*.

<https://www.aalborgteater.dk/wp-content/uploads/2016/05/yahya-hassans-digte-undervisningsmateriale.compressed.pdf>

*Den Danske Ordbog*. <https://ordnet.dk/ddo>

Lyse nætter

Nu kommer fuglene igen  
Og lyset vælter pludselig ind  
Det kommer gennem alle sprækker, lyse nætter er tilbage  
Alt hvad der rørte sig blev gemt  
Da du var rejst var det så nemt  
Men hjertet ved godt hvad det ønsker sig, at pynte sig for dig  
Du er tilbage, du er hos mig  
Du er tilbage, med varme dage, du er hos mig  
Nu kommer lydene igen  
Og verden vælter pludselig ind  
Med parasoller og sandaler  
Bølger maler alt i sand  
Jeg havde huset fuld af vind  
Og nye frugter fløjet ind  
Men hjertet ved godt hvad det ønsker sig, at pynte sig for dig  
Du er tilbage, du er hos mig  
Du er tilbage, med varme dage, du er hos mig  
  
Du er tilbage, du er hos mig  
Du er tilbage, med varme dage, du er hos mig

## 夏の夜

鳥たちが戻り

ふと光が差し込む

あらゆる隙間から陽が漏れ、夏の夜が戻ってくる

波立つ心をしずめて

いってしまった時は何ともなかった

でも心に嘘はつけない、あなたのために装っていることを

あなたは帰る、私のもとに

あなたは帰る、暖かい日に、私のもとに

音が戻り

あらゆるものがどっとなだれ込む

パラソルとサンダルと

砂にすべてを描く波

家に風を吹き込み

新しい実が入り込んだ

でも心に嘘はつけない、あなたのために装っていることを

あなたは帰る、私のもとに

あなたは帰る、暖かい日に、私のもとに

あなたは帰る、私のもとに

あなたは帰る、暖かい日に、私のもとに

(出典 : *Højskolesangbogens 19.udgave*, 2020)

(久保田真由 訳)



## 1. 作者紹介：Alberte Winding (1963-)

子供から大人まで一般的に Alberte という名で知られており、歌手であり女優としても活躍している。コペンハーゲンの Tisvilde と Ærø の Skovby で育った。兄の Kasper Winding と Aske Bentzon と一緒に、Danmarks Radio で働く父親、Thomas Winding の番組でキャリアを始める。中でもデンマークの子供番組 *Bameses billedbog* 『バムスの絵本』の Luna 役として子供たちの間で有名になる。また *Strømer* 『警察』という映画で Lis 役も演じた。その後 Jan Rørdam というミュージシャンと結婚し、約 20 年ともに過ごした。彼と共にポップスや子供向けの音楽を作り、演奏したが 2001 年に離婚した。有名なフランス人画家、Paul Gauguin のひ孫であるという一面も持つ。2015 年に 18 歳年下のギタリスト Andreas Fuglebæk と再婚する。また 2018 年に *Kastevind* 『突風』という自身の子供時代についての本を出版した。

## 2. 作品紹介

1987 年に兄である Aske Bentzon がメロディーを書き、数年後 Alberte がメロディーに合わせて詩をつけた。1991 年にアルバム *Lyse nætter* として発表。“Lyse nætter” は 2020 年に新しく出版された *Højskolesangbogen* の中にも収録されている。この曲は子供から大人まで幅広い世代に愛されており、様々な場面で現在も歌われている。

## 3. 作品分析

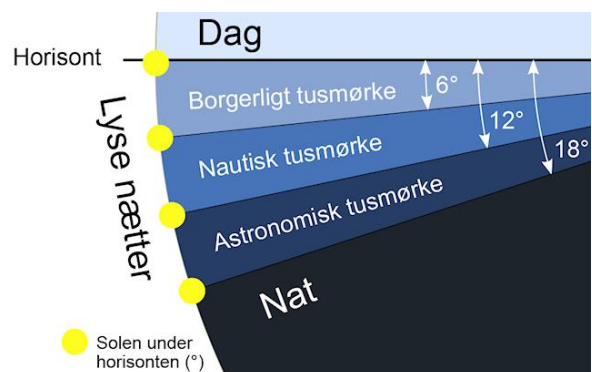
### 3.1. 詩と季節について

#### 3.1.1. タイトル Lyse nætter

太陽が地平線から 6 度より下に沈まない *Borgerligt tussmørke* (市民薄明)、地平線から 12 度より下に沈まない *Nautisk tussmørke* (航海薄明)、地平線から 18 度より下に沈まない *Astronomisk tussmørke* (天文薄明)を合わせて *lyse nætter* という。デンマークでは一般的に 5 月の第 1 週から 8 月の第 1 週までの間 *lyse nætter* を見ることができる。したがってタイトルからこの詩はデンマークの夏について扱った詩であると考えられる。

白夜：

極に近い地域で夏の間、日没から日の出までの時間、錯乱する太陽光のために薄明かりを呈すること。



### 3.1.2. 詩の中の単語

詩全体を通して明るい夏を想起させる単語が多く用いられている。lys (光), varme dage (暖かい日), parasol (パラソル), sandal (サンダル), bølge (波)。以上のように詩の中で用いられている単語からも夏を想起することができる。

### 3.1.3. デンマークにおける lyse nætter

デンマーク人は私たち日本人に比べて夏や太陽、日の長い夜を大切に生きているように感じる。それは約半年間の暗く寒い冬を経験しているからこそではないだろうか。夏や明るさを心から楽しむことができるのは、冬の暗さを経験しているからこそであり、lyse nætter は夏だけでなく裏に冬のイメージも含有していると考えることができる。同様にこの詩は明るい夏について扱った詩でありながら、読む人にどこか寂しげな印象を与える。タイトルである lyse nætter の「夏と冬の表裏一体のイメージ」と、詩の「喜びと寂しさ」両方を感じ取ることができる雰囲気がよく合っている。

## 3.2. du についての解釈

この詩の中で繰り返される印象的なフレーズ“du er tilbage, du er hos mig”「あなたは帰る、私のもとに」の du(あなた)とは誰を指すのか。以下の項で分析する。

### 3.2.1. 作者の想い

作者は自殺した母親を想って書いた詩だと述べている。作者は子供時代を振り返り、学校から帰ると一人で母親の帰りを待たなければならず、孤独を感じていたという。この詩からは自殺のような暗い雰囲気を感取することはできないが、lyse nætter と、作者が長年心に抱えてきた「温かく明るい母親像」を重ね、lyse nætter の季節になると、自然と母親のことを思い出してしまう作者の想いを読み取ることができる。

### 3.2.2. その他の解釈

ゼミの中で意見を聞いたところ、du(あなた)は別れた恋人のことを指していると考える人が多かった。しかし詩の du という表現からは具体的な人物を読み取ることはできない。あえて du という表現を用いているのは「jeg(私)から見た du(あなた)」を表現し、詩の中の jeg にとって近い存在を表そうとしたと考えられる。また Alberte は du という表現を用いることによって、特定の誰かを表そうとしているのではなく、読者一人一人の解釈に委ねていると考えた。読者の解釈に委ねることで、多くの人の共感を生み、幅広い世代に愛される詩となったと考えられる。

### 3.3. 詩の韻とメロディー

韻を多く踏み、繰り返しのフレーズが多い点がこの詩の特徴だと感じる。また、韻の踏み方と曲のメロディーが絶妙にマッチしていて、心地よい響きを生み出している。その要因の一つとして、兄 Aske Bentzon が書いたメロディーに作者 Alberte が詩をつけるという、作曲作詞の順番が影響していると考えられる。繰り返される美しいメロディーと、詩の韻がよくマッチしていて、“Lyse nætter” は兄妹で作った傑作であると言える。

## 4. まとめ

“Lyse nætter” を聴くと、昨年の夏デンマークで過ごした思い出が蘇ってくる。フォルクヘイスコーレでの生活の中で毎日たくさんの歌を歌ったが、特に“Lyse nætter” は耳に残る心地よいメロディーと歌いやすさで最も心に残っている歌の一つである。この詩の作者 Alberte が lyse nætter と母親を重ねたように、私にとっての lyse nætter はデンマークでの思い出である。実は1年前からこの詩を扱いたいと考えていたが、この歌への思い入れが強い分、詩の翻訳に特に苦勞した。翻訳の際、できるだけ美しいメロディーに合う日本語を選び、広い意味を持つ日本語を用いることで、解釈の幅を持たせることを意識した。デンマークの友達に翻訳のアドバイスをもらい、またゼミの中で詩の解釈について多くの意見をもらったことで、自身では気づくことのできなかつた解釈に気づき、詩への理解が深まった。サマーコースから1年が経とうとしている今、思い描いていた4回生の夏を過ごすことが難しくなってしまった現在の状況の中で、もう一度この詩と向き合えたことは良い経験となった。最後に“Lyse nætter” の分析をする中でふと頭の中に浮かんだ『夏の思い出』の歌詞を引用する。

1 夏がくれば 思い出す

はらかな尾瀬 遠い空

霧の中に うかびくる

やさしい影 野の小径

水芭蕉の花が 咲いている

夢見て咲いている水のほとり

石楠花色に たそがれる

はらかな尾瀬 遠い空

2 夏がくれば 思い出す

はらかな尾瀬 野の旅よ

花のなかに そよそよと

ゆれゆれる 浮き島よ

水芭蕉の花が 匂っている

夢見て匂っている水のほとり

まなこつぶれば なつかしい

はらかな尾瀬 遠い空

(江間章子作詞・中田喜直作曲)

この曲をふと思い出し、「夏がくれば思い出す」のは国籍や年代などによらず、人それぞれ夏の思い出があると気づくことができた。私自身、国や年代を超えて“Lyse nætter” に惹かれたように、今後も“Lyse nætter” は多くの人に歌い継がれていくのではないだろう

うか.

## 5. インターネット上の資料

HØJSKOLESANGBOGEN, Lyse nætter.

<https://www.hojskolesangbogen.dk/om-sangbogen/historier-om-sangene/j-l/lyse-naetter/> (2020年8月1日最終確認)

Bibzoom, Lyse nætter.

<https://bibzoom.dk/musikartikler/lyse-naetter> (2020年8月1日最終確認)

Alberte Winding om sin mors selvmord: "Jeg tror, hun havde en dødsdrift i sig, siden hun var ung",

ALT.<https://www.alt.dk/artikler/alberte-winding-om-sin-mors-selvmord> (2020年8月1日最終確認)

DMI, Nu begynder sommerens lyse nætter.

<https://www.dmi.dk/nyheder/2017/nu-begynder-sommerens-lyse-naetter/>

(2020年8月1日最終確認)

Wikipedia, Alberte Winding. [https://da.wikipedia.org/wiki/Alberte\\_Winding](https://da.wikipedia.org/wiki/Alberte_Winding) (2020年8月1日最終

確認)

Og det var mormor

Og det var mormor der var fra Småland  
og drog til Danmark og slog sig ned  
hos vores onkel og hendes datter  
der var min tante så vidt jeg ved.

Og mormor bode i vaskehuset  
og hun hed Sara og længtes hjem  
til Gud og Rösmåla i det fjerne  
når hun fandt bibel og briller frem.

Og hun var sort håret som en tater  
og meget gammel og tynd og krum  
og talte svensk med en lille stemme  
og sad og frøs i sit vaskerum.

Og ingen bød hende ind i varmen  
og kom hun ind sad hun stum og stiv  
og hendes øjne blev meget mørke  
som var hun flygtet fra dette liv.

Og jeg kan huske at hendes hænder  
var grå og slidte og meget ru  
og strøg mig varsomt henover kinden  
og mere husker jeg ikke nu.

Og da hun døde var mor fortvivlet  
og sad og græd i de sorte klær  
for gamle mormor der var fra Småland  
og aldrig fandt sig tilrette her.

## おばあちゃんのこと

おばあちゃんはスモーランド生まれだった  
デンマークへやってきた  
おじさんとおばあちゃんの娘のところに  
それは知る限り僕のおばさんだった。

おばあちゃんは洗濯場で暮らした  
おばあちゃんはサラという名前で故郷を恋しがっていた  
遠くのロスモーラ，神様のところ  
おばあちゃんが聖書と眼鏡を見る時はいつもそうだった。

おばあちゃんの髪は黒くてジプシーみたいだった  
とても老いていて細くて腰が曲がっていた  
小さな声でスウェーデン語を話していた  
自分の洗濯場で凍えていた。

誰もおばあちゃんを暖かい部屋に入れてあげなかった  
おばあちゃんの中には黙って固まっていた  
おばあちゃんの瞳はとても暗くなった  
まるでこの生活から逃げだしたかのようだった。

僕はおばあちゃんの手を覚えている  
灰色でささくれてとても荒れていた  
僕の頬を用心深くなでた  
それ以上は覚えていない。

おばあちゃんが死んだ時お母さんは絶望した  
喪服に身を包み泣いていた  
スモーランド生まれの老いたおばあちゃんを想って  
おばあちゃんはこの居場所を見つけられなかった。

(出典：Og det var det, 1977)

(里見董 訳)

## 1. 作者紹介：Halfdan Rasmussen (1915-2002)

デンマークの国民的な詩人。特に韻を踏んだ詩や、子ども向けの少しふざけた詩を書いたことで知られている。

コペンハーゲン Christianshavn の労働者階級地区に生まれる。貧しい環境であったにもかかわらず、彼自身は貧しいと感じることなく育った。しかしそうした子ども時代に身につけた社会の下層部に生きる者としての感覚は、彼の作品に表れている。

14歳で学校を出ると様々な職に就いたが、1930年代に他の多くの人々とともに失業する。その後 Roskilde Arbejderhøjskole や Helsingør の Den Internationale Højskole に滞在する中で本の世界と出会い、詩を書き始めた。1941年に *Soldat eller menneske* 『兵士か人間か』で詩人としてデビューする。

Jeg skriver sjove digte.

私は面白い詩を書く。

Jeg skriver også triste.

私は悲しい詩も書く。

De første læser andre folk.

前者を人々は読む。

Selv læser jeg de sidste.

私自身は後者を読む。

子ども向けの詩でよく知られている Halfdan Rasmussen は、多くの読者から、笑いを誘うユーモア詩人としてのみ認められていることを、上記のように自虐的に述べている。第二次世界大戦の影響により暗い時期であった、1940年代や50年代から約半世紀の間、彼はデンマークの国中の読者へと、陽気で楽しい詩や、ナンセンスな短いフレーズを次々に作り出した。Halfdans ABC『Halfdan の ABC』(1967年)は彼の作品の中で最もよく知られた児童書であり、デンマークの子どもたちは、彼の言語やユーモアとともに成長してきたと言われる。また彼の言語は音楽的であるとも言われ、実際にいくつもの詩に曲がつけられた。

そうした楽しくユーモアに富んだ詩を書くことと並行して、Halfdan は真面目なテーマを扱った詩集も多数出版している。彼は社会や政治に対する関心が高く、人間の不正や不公平に対して戦う理想主義者であった。読者はそのような彼の作品を通して、夢と現実を調和させることの難しさや、Halfdan の作品が持つ深さを感じることができる。

## 2. 詩の解釈

今回扱った詩 “Og det var mormor” 「おばあちゃんのこと」は、1977年に出版された詩集 *Og det var det* 『あの頃』の最初の詩である。この詩集は Halfdan Rasmussen が初めて自分の子ども時代を取り上げた詩集であり、当時子どもであった彼の視点から描かれている。

“Og det var mormor” という詩は題名の通り、彼の祖母がテーマとなったものである。ここでは、詩の背景となった Halfdan の家族関係や、子どもであった Halfdan の視点、また

この詩のリズム感に着目しながら、詩の解釈を行う。

## 2.1. 詩の背景

詩の第1連で述べられているように、Halfdanの祖母はスウェーデンのスモーランド出身であった。第2連に出てくるロスモーラは、スモーランド地域の地名である。このことから、祖母はスモーランド地域の、ロスモーラに住んでいたと考えられる。

3人の娘がいた彼女は、仕事を得ることや、娘たちと良い関係を築くことを願って、見知らぬ土地であったデンマークへとやってきた。3人のうち2人の娘は結婚し、Nakskovの家で夫とともに暮らしていた。そこへやってきた彼女は、娘たちとその夫がNakskovの母屋に住んでいる間、外の洗濯小屋で暮らしていた。

Halfdanの母であった、彼女の3番目の娘は、仕事を得るために夫とともにコペンハーゲンで過ごしていた。Halfdanの家族が、おじやおばたちを訪ねた時、祖母と会うためには庭の洗濯小屋へ行かなければならなかった。Halfdanの兄弟のMilnerは、彼女がそのように1人で小屋に住んでいたことが、どれほど不快なものだったかと話している。

詩の第1連で、「その娘は知る限り僕のおばさんだった」とあることから、Halfdanとおばたちとの距離は遠いものだったと考えられる。また祖母が洗濯場に住んでいたことに加えて、第4連「誰もおばあちゃんを暖かい部屋に入れてあげなかった」「おばあちゃんは中にきても黙って固まっていた」という部分から、おばたちは祖母を厄介な存在と考え、同じ家に住みながらも彼女と関わろうとしていなかったことがわかる。また第3連に描かれているように、彼女がスウェーデン語を話したことや、北欧では珍しい黒髪であったという外見も理由となって、彼女は同居する家族から厄介者として扱われていたとも考えられる。また第4連「おばあちゃんの瞳はとても暗くなった」「まるでこの生活から逃げだしたかのようだった」という部分から、祖母自身も娘たちと関わることを、良い関係を築くことをあきらめてしまったことがわかる。

一方で第5連の「おばあちゃんが私の頬を撫でた」という描写からは、祖母からHalfdanへの愛情を感じることができる。また、第6連「おばあちゃんが亡くなった時にお母さんは絶望した」「喪服に身を包み泣いていた」という描写から、Halfdanの母は、祖母に対して何もできなかったことを悔いて泣いていたと言える。これらの描写から、Halfdanや彼の母と祖母との関係は、おばたちの家族と比較して親しいものであったのではないかと考えた。



## 2.2. 詩のリズムと語り手の視点

6つの連からなるこの詩では、ほとんどすべての行が“Og det var”という語句や、これと似たリズム感を持つ、3単語からなる語句で始められている。こうして読者に詩のリズム感を印象づけることで、読み進めやすい文体を作り出していると考えた。また題名や第一連からすぐにOg(そして)という接続詞を用いることで、読者を詩の世界に引き込むとともに、何気ない日常の続きのことである、という感覚を読者へ与えているように感じられる。

押韻について見てみると、第1連では1,2,4行目、第2連から第5連までは2,4行目、第6連では1,3行目と2,4行目で、それぞれ同じ文字や音で終わる単語が用いられ、韻が踏まれている。第5連の1,3行目はhænder(手)とkinden(頬)という、体の部分を表す単語で終わっているところにも対応関係があると考えた。また第2連、第4連で、1行目と3行目に注目してみると、(vaske)huset(家)とfjerne(遠く)、varmen(暖かい)とmørke(暗い)という語で終わっていることから、娘たち家族が住む暖かい家の様子と、遠くの故郷を想い、暗い様子の祖母が対比されているように感じた。

詩の第1連から第4連までは、祖母の生まれ、現在の様子、外見、家族との関わりについてといった順に、子どもの「僕」の視点から祖母についての描写が続いている。第5連と第6連では、僕や母と、祖母との関わりを読み取ることができるが、その時の僕の感情については書かれていない。

このように、この詩は全体を通して、僕の感情の描写なしに、事実や出来事が淡々と描写され、進んでいく。特に第6連では、祖母が亡くなって泣いている母の様子が描かれているが、僕はその様子を、一歩引いた視点から見ているように感じた。祖母に頬を撫でられた場面が描かれている第5連には「それ以上は覚えていない。」とあることから、僕が子どもであった当時から、この詩が書かれるまでに時間が経っているために、記憶が薄れ、感情的な描写がないとも考えられる。また子どもであった僕は、そうした祖母や家族の出来事を、どのように受け止めるべきなのかということがわかっていなかったのかもしれないと考えた。

それでもHalfdanには、家族の中に居場所を見つけられず孤独を感じる祖母の姿が、長い間印象に残っていたからこそ、この詩が書かれたのだろう。この“Og det var mormor”という詩が入っている詩集*Og det var det*が出版された1977年は、Halfdanが62歳になる年であった。作家であるHalfdanは、少しずつ当時の祖母の年齢に近づいていくことで、老いていく中での寂しさや孤独をよりうまく表現することができたのではないかと考えた。また、子ども向けの詩や児童文学でよく知られるHalfdanであるからこそ、子どもに立ち返った視点から、「孤独」や「老い」、「死」といった、暗さを含む物語を、読みやすく描くことができたのではないかと感じた。このように、語り手を子ども、大人の双方に設定

して詩を書くことができた彼の特徴が、この詩に活かされていると考える。

### 3. まとめ

以上のように“Og det var mormor”という詩は、作家となった Halfdan Rasmussen が、子どもであった当時の視点から、自身の祖母について扱った詩である。家族の中で孤独を感じる祖母の様子を、読みやすい単語やリズム感を用いながら、淡々と描いているところが印象に残る詩であると感じた。また、そうした表現方法を用いた詩という形であるからこそ、読者は詩の中の「僕」や「おばあちゃん」について解釈することができるとともに、作者の経験をどこかで自分と重ねることができるのではないかと考えた。

#### インターネット上の資料

Halfdan Rasmussen, forfatterweb.

<https://forfatterweb.dk/oversigt/rasmussen-halfdan-voksenportraet> (2020年5月29日確認)

Lene Bredsdorff (2010), *Halfdan* : Lindhardt og Ringhof.

[https://books.google.co.jp/books?id=lmTbdPbaB8cC&pg=PT199&lpg=PT199&dq=rösmåla+gud&source=bl&ots=BuDSqjOkC2&sig=ACfU3U3KLFrip8rLQxxXMC4YRHc0JU6d4A&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKEwixq\\_DY0MvpAhUCGKYKHxfGD2UQ6AEwAHoECAoQAQ#v=onepage&q=rösmåla%20gud&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=lmTbdPbaB8cC&pg=PT199&lpg=PT199&dq=rösmåla+gud&source=bl&ots=BuDSqjOkC2&sig=ACfU3U3KLFrip8rLQxxXMC4YRHc0JU6d4A&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKEwixq_DY0MvpAhUCGKYKHxfGD2UQ6AEwAHoECAoQAQ#v=onepage&q=rösmåla%20gud&f=false) (2020年8月2日最終確認)

BALTISK MAJMORGEN

Nu bliver himlen bag grantræerne grå igen  
og fuglene begynder så småt.  
Hvad skal jeg med søvnløshed, hvad skal jeg med drøm?  
Det ene kan have opslugt alle disse år, såvel som det andet.  
Stien, der forsvinder ind under grenene i morgentågen  
er jeg gået bort af, kommet af igen, og næsten død af  
overalt i hele verden.  
Og hvis fuglene ikke synger af kedsomhed  
vil jeg hævde, at det er mig, som ikke har levet.

バルト海の5月の朝

トウヒの木々の向こうの空は再び灰色がかり  
鳥たちは少しずつ歌い始める。  
眠れない私は何をしたら良いだろうか、夢の中で何をしたら良いだろうか？  
ここ何年も不眠症に飲まれていただろうか、夢についてもそうだ。  
朝霧の中で小枝の下に消えていく道を、  
そこを私は何度も行き来した、そして死にかける経験をしてきた  
世界のあらゆる場所で。  
そしてもし鳥たちが退屈のせいで歌わないのなら  
私こそが生きてこなかったと、私は言いたい。

(出典 : Udvalgte digte, 1981)

(菊井彰乃 訳)

## 1. 作者について—Henrik Nordbrandt

ヘンリック・ノーブランは、1945年にデンマークのフレゼクスベア(Frederiksberg)に生まれた。彼の父親は司令官で、母は法学士だった。両親は、子供にはむやみに干渉せず、あるがままに過ごせば良いという教育方針だった。しかし幼少期の彼は、両親の不在によって精神的にも肉体的にも寂しい思いをして育った。ネグレクトとも考えられる。彼は学校でも楽しみを見つけられなかった。読み書きや算数が苦手で、先生のいうことも聞かず、半分ほどしか出席しなかった。繊細で敏感だった彼は、心的外傷から摂食障害に苦しむ経験もした。大学はコペンハーゲン大学に通い、そこで中国語、トルコ語、アラビア語を学んだ。大学を卒業後、1966年に詩集『詩』*Digte* でデビューした。デビュー以降、彼は30以上の詩集を出版してきた。詩集に加え、子供向けの本や犯罪小説、料理本、日記、回想録など、様々なジャンルの本を出版している。彼の作品はデンマークだけに留まらず、他の言語に翻訳されているものもある。彼の作品は評価され、1980年に生涯助成金(Statens Kunstfonds livsvarige ydelse)を授与され、2000年には詩集『夢の橋』*Drømmebror* (1998)で北欧評議会文学賞(Nordisk Råds Litteraturpris)を受賞するなど、多数の文学賞と助成金を受け取っている。

## 2. 作品分析

### 2.1. 詩の与えるイメージについて

まず、この詩から伝えわるイメージについて分析を行う。筆者が行うヘンリック・ノーブランの詩の分析は今作品で三作目である。分析を進める中で、彼の略歴について触れるのは不可避であると感じてきた。第一章で述べたように、数々の章や助成金の授与する一方、彼はデビュー後、スペイン、トルコ、ギリシャなどの海外に行き、長期滞在をした。デンマークよりも明るく暖かい空の地中海を好んでおり、近年になってようやくデンマークに戻った。デンマークの薄暗く雨に濡れた11月は数ヶ月も続くように感じられる、と詩の中でも詠っている<sup>1</sup>。筆者が2018年に翻訳した「ふるさと」“Hjemme” (2000)でも、色鮮やかな地中海の風景を詠んでいるなど、地中海地域への愛着がうかがえる。よってその詩では、色彩豊かで明るいイメージが感じ取られた。それに対し、今回分析を行う「バルト海の5月の朝」では、「灰色」「朝霧」などの表現から、白黒はつきりせずボヤけたイメージが感じ取られる。これは作者が抱えていたデンマークに対する思いが関係するのではないかと考えた。作者がデンマークで過ごした幼少期の経験から、デンマークに対しての想いがクリアなものではなくなってしまうと推測される。両親から深い愛情を与えてもらえなかったことや、学校に馴染めなかったこと、摂食障害を経験したことが、彼がデンマークに持つ印象の悪化に影響を与えたのではないだろうか。

<sup>1</sup> 詩集『11月の手の震え』*Håndens skælven i november* に収録されている「1年は16ヶ月」”Året har 16 måneder”(1986)より

## 2.2. 作者が抱える不安定さ

前章で述べたように、「バルト海の5月の朝」は暗くぼやけた印象を与えている。本章では、なぜ作者がそのようなイメージを伝えているのか、どの表現がそのような印象を与える役割を担っているのかについて分析を行う。

まず題名に注目したい。「バルト海」「5月の朝」がそれぞれどのような役割を果たし、それらが合わさることによって発揮される効果について示していく。「バルト海」は、北ヨーロッパに位置する地中海<sup>2</sup>であり、西岸にスウェーデン、北東にフィンランド、東岸にバルト三国、南にポーランドやデンマークに囲まれている。ここでバルト海を取り上げることで、作者自身がヨーロッパ地中海との比較を行なっているのではないかと考えられる。同じ「地中海」という地形を持っているがそれぞれの地域が持つ特徴は異なったものであり、作者にとっても全く印象を与える場所であると言える。そのため、「バルト海の5月の朝」では、ヨーロッパ地中海とは異なるバルト海の情景を詠んでいるのであろう。次に「5月の朝」が持つ意味について考える。バルト海における5月とはどのような季節なのか。それは、暗く長い冬からようやく日が長くなる時期である。しかし、降水日数が多く、日照時間が短いのが特徴である。そのため、日中でも薄暗いことが多い。冬から春になり明るくなりそうなのになかなか明るくなりきらない、そんなもどかしさやモヤモヤした感情が、作者が抱いていたナイーブな思いと一致するため、「バルト海」の「5月の朝」という情景を題材にしたのではないと思われる。

それでは作者が抱えていたモヤモヤした思いとは何なのだろうか。作者は詩集『夢の橋』でも表現しているが、否定的なものと肯定的なものが混ざり合った感情を表現しており、絶えずナイーブなことを表現している。本作品でもその傾向が見られる。全体的には薄暗い印象を受けるが、細かく見ていくと必ずしも否定的なだけではないことがわかる。3行目と4行目では、不眠症と夢について語っている。不眠症は一見するとマイナスな印象を受ける。しかし作者は不眠症に悩まされていただけではないのではないかと考えられる。それは、「夢についてもそうだ」と述べているからである。作者は不眠症によって眠りが浅くなったが、それによって夢を見ることで想像力を膨らますことができたのだ。この想像力は自身の詩人としての活動に活かされるものであった。そのため、作者にとって不眠症であったことは必ずしもネガティブなものではなかった。ここでは、不眠症に悩みつつもその不眠症のお陰で今の自分があるというモヤモヤした気持ちを詠んでいるのではないだろうか。

また、5行目以降では、自身の経験について語っている。「世界のあらゆる場所で」死にかけるような経験をしてきた作者は、バルト海の朝霧の中へと続く道を歩きながら、

<sup>2</sup> 陸地で囲まれ、狭い海峡で大洋とつながっている海。ヨーロッパ地中海とは、一般的に地中海と称される海のことを指し、ヨーロッパ・アフリカ・アジアの三大陸に囲まれた海のことをいう。

自身の過去の経験に思いを馳せている。最終行でも「生きてこなかった」と語っているが、それは「生きた心地がしなかった」のではないだろうかと筆者は考える。そしてそこに登場する「退屈にしている鳥たち」はデンマークを表していると考えられる。その鳥たちは決まった場所に住み着き、決まったことを行い、決まったモノを食べる。代わり映えない毎日に飽きてしまっている鳥たちは、内向的なデンマークの比喻とも捉えられる。不眠症と夢との間の葛藤を抱きながら必死に活動している作者は、退屈そうにしている鳥たちを見て、自身の必死さに虚しさを覚えたのではないだろうか。そしてデンマークに失望のような感情が芽生えたのではないかと考えられる。しかしながら、つまらないデンマークへの風刺のような表現をする一方で、北欧を代表する海であるバルト海を見ながらそのようなことを詠む作者は、心のどこかで故郷であるデンマークや北欧に一種の愛着のような感情を持っているのではないだろうか。この詩の発表のしばらくのちになるが、近年になって作者はデンマークへと戻った。デンマークに対する否定的な感情を持ちつつも、決して肯定的な感情を捨てきれない葛藤を表しているのではないかと考える。

### 3. まとめ

この詩を通して、否定的なものや肯定的なものの中で揺らぐ作者の葛藤を感じ取ることができる。全体的な印象としては、薄暗く否定的なものを感じる。しかし言葉の奥の意味を読み込んでいくことで、決して全面的にマイナスなことを述べているのではないことがうかがえる。このことから、作者自身がマイナスな感情とそこにあるプラスの感情の両方を抱え、その間で彷徨うモヤモヤした感情に悩まされているように感じ取られる。以前翻訳した「ふるさと」“Hjemme”では、ヨーロッパ地中海に対する愛着の気持ちを読み取り、作者はデンマークではなくヨーロッパ地中海に心の拠り所を移したと想っていた。しかし、今回の詩を翻訳していく中で、完全にデンマークを捨てたのではなく、デンマークに対して思いを馳せる姿を読み取ることができた。ヨーロッパ地中海とバルト海と、ゼロか 100 か、そんな気持ちの切り替えが簡単にできるようなものではないことに深く共感すると共に、作者の心の揺らぎから作者自身の人間性が垣間見れた気がした。彼についてのインターネットの情報では「デンマークについて批判的な考えで有名」と説明されているのをよく目にするが、決してデンマークへの想いがゼロになったのではなく、愛を持っているからこそ否定的な感情も芽生えているのではないかとも考えられた。作者の人間性を感じ取ることができた今回の「バルト海の 5 月の朝」という詩の分析を通して、詩が彼の心のうちを覗かせてくれることを再認識し、彼の考えにもう少し触れてみたいと思わせてくれた。

### 参考文献

インターネット資料

FORFATTER HENRIK NORDBRANDT. Litteratursiden.

<https://litteratursiden.dk/forfattere/henrik-nordbrandt>(2020年12月11日最終確認)

Henrik Nordbrandt. Forfatterweb. <https://forfatterweb.dk/oversigt/nordbrandt-henrik> (2020年12月11日最終確認)

## Jens Rosendal の詩

藤原 希

### Forelskelsessang

Du kom med alt hvad der var dig  
og sprængte hver en spærret vej  
og hvilket forår blev det!  
Det år, da alt blev stærkt og klart  
og vildt og fyldt med tøbrudsfart  
og alting råbte: lev det!

Jeg stormed' ud og købte øl  
ja, vintrens gamle, stive føl  
fór ud på grønne enge  
og du blev varm og lys og fuld  
og håret var det pure guld  
som solen – skjult for længe

Og blomster åbned' sig og så  
at nu blev himlen stor og blå  
og stunden født til glæde.  
Din næve var så varm og god  
og du blev smuk og fuld af mod  
så smuk, jeg måtte græde.

Vorherren selv bød ind til fest  
og kyssed' hver benovet gæst  
i kærlighedens sale  
med øjne, undrende og blå  
vi bare så og så og så  
og slugte livets tale:

At livet det er livet værd  
på trods af tvivl og stor besvær  
på trods af det, der smerter,  
og kærligheder er og bli'r  
og hvad end hele verden si'r

### 愛のバラード

君はそのありのままの姿であらわれた  
閉ざされていた道をすべて吹き飛ばして  
それはなんとすばらしい春だったことか！  
それはすべてが強烈で鮮やかな年だった  
野生的で雪が瞬く間にとけてしまうかのように  
そしてこう叫んでいた：人生は一度きりだ！

私は急いでビールを買いにはしり出た  
そう、冬の寒さに雁字搦めになった馬の子が  
勢いよく緑の牧草地に走り出るかのように  
君は満ち足りた大らかな気分になって酔った  
その髪は混じりけのない美しい金色だった  
— あまりにも長い間封印された太陽のように

花たちが咲いたときある光景を目にした  
空が大きく青いことを  
そして喜びが一瞬にして生まれた。  
君の掌はとても温かく立派だった  
君は美しく勇敢さに満ちてきた  
私が涙するほど、とても美しかった。

主なる神自身が祝宴に招き入れ  
当惑していたすべての客にキスをした  
愛の殿堂で  
私たちは驚いた青い目で  
ただただ呆然となって  
その人生の教訓にむさぼるように聞き入った：

人生はどの人生も価値がある  
疑いや大きな困難があるとしても  
痛みがあるとしても、  
愛は今もこれからもすぐそばにある  
たとえ全世界がなんと言えども



så har den vore hjerter

愛は私たちがやさしく包み込んでくれる

(出典： *Højskolesangbogens 19. udgave*, 1989)

(藤原希 訳)

## 1. 作者紹介

イエンス・ローセンドール(Jens Rosendal, 1932-)はデンマーク・セービュー(Sæby)生まれのフォルケホイスコーレの教師、詩人である。1965年～95年までフォルケホイスコーレで教師として働いた彼は、デンマークのフォルケホイスコーレ協会が出版する雑誌 *Højskolebladet* の編集者も務めてきた。フォルケホイスコーレの歌集に収録されている彼の作品は13作におよび、この数は存命する詩人の中で最多である。またヴェンシュセル(Vendsyssel)<sup>1</sup>にある会衆派(Indre Mission)の家庭で育ち、キリスト教界でその名を馳せてきた。2004年にデンマーク国内のキリスト教日刊新聞である *Kristeligt Dagblad* 内で発言した討論において、同性愛者に対する会衆派の反対姿勢を批判し、自身が会衆派家庭の出身である一方で同性愛者であることを強調した。

## 2. 作品概要

この詩 ”Forelskelsessang” はローセンドール自身が1981年、教師として働いていたルーゴムクロスタ・フォルケホイスコーレ(Løgumkloster Højskole)で30歳年下の男子生徒ウルレク(Ulrik)と恋仲になった際にももの半時間で書き終えたものである。当時、妻と三人の子どもと暮らしていたローセンドールであったが、50歳にして初めて心から人を愛するということを経験し、苦悩の末、それまでの生活にピリオドを打ちウルレクと人生を共にすることを決心した。

のちの1987年にピア・ヴァーミング(Per Warming)がメロディを加え、1989年にフォルケホイスコーレの歌集第17版に掲載されたことがきっかけとなり、デンマーク国内に広く知られるようになった。この曲が掲載された当時はローセンドールが同性愛者であることは知られていなかったが、2000年にウルレク(Ulrik)がわずか39歳で亡くなった当時のインタビューで明らかになった。この事実が明らかになったことでそれまでは

<sup>1</sup> スケーイラク(Skagerrak)とカデガト(Kattegat)の2つの海に挟まれた北ユランの島・地方。

普遍的な愛を詠んだ歌として認識されていたが、マイノリティの代弁者としての役割も担うようになった。今日におけるその人気ぶりはフォルケホイスコーレの歌集を床に落とすと、この曲のページで必ず開くとされているほどであり、結婚式や葬式、パーティーなどのさまざまなシーンで幅広い世代に歌われて続けている。デンマーク国外においてもすでに18の言語に翻訳されている。

### 3. 作品分析

ここでは、詩の構造分析、詩の訳、そしてこの詩がもつメッセージ性についての考察を通し、作品への理解を深めることとする。

#### 3.1. 詩の構造

この詩は6行5連で成り立っており、第1連の1行目で「君」があらわれたところから、続く第2連、第3連、第4連まで物語的な情景の変化が読み取れる。第5連に関しては前連最終行のコロンが示している通り、引用句としての役割を持っている。

文法的観点から見ると、第1連～第4連を通してすべて過去形が用いられている一方で、第5連では現在形が用いられていることから、過去の出来事として物語的に描写される第1連～第4連とは異なり、ここに今もこれからも変わらない「教訓」として作者が最も伝えたい肝となるメッセージが示されていることがわかる。また詩全体を通して難解な文法は使用されておらず、“og”が多用されていることや基本レベルの単語が使用されていることも相まって、比較的年少の子どもたちにとっても易しい詩である。また、全連共通して1・2行目、4・5行目、3・6行目において脚韻が踏まれていることにより、リズムカルで軽やかな印象を与え、メロディを加えるのに適した詩であるといえよう。

#### 3.2. 詩の訳

比較的容易な単語で構成された“Forelskelsessang”であるが、訳するにあたり少々検討が必要な箇所がいくらかあった。以下に各箇所の訳出しについて考察する。

◆ タイトル

この詩のタイトル“Forelskelsessang”は直訳すると「愛のうた」となるが、前節で検討した通り物語的に詩が詠まれていることから、単なる「うた」ではなく物語詩のことを指す「バラード」という訳がこの詩の構成や内容と一致する。さらにゆっくりとしたテンポのメロディがつけられているということを考慮してもこの訳が適切であると考えた。

◆ 第1連

5行目：“fyldt med tøbrudsfart”

“fyldt med”は[～ng(t) med ngt ...を...で満たす・いっぱいにする]という熟語であるが、“tøbrudsfart”という単語は「(雪・氷・霜などが)溶けること、雪解け(の季節・時期) ”tø”, 「破壊, 破ること」 ”brud”, 「速度, 速さ, スピード」 ”fart”の複合語であり訳するにあたって工夫が必要であった。直訳すると「雪解けを破る速さで」となるが、これを“fyldt med”の後に続けて訳すると「雪解けを破る速さで満たされた」となり不自然な訳となった。そこでネイティブに確認してみると、この単語は辞書にも載っておらず、滅多に用いられることはないが、稀に物事が非常に速い速度で発展していくことを描写する際に用いられる単語であることがわかった。さらに、“tøbrud”という単語自体の意味は「長い期間霜が降りるような天気が続いた後におとずれる雪解けをとまなう暖かい気候」のことを指すという。

以上のことから、“tøbrudsfart”という単語は詩の中で春の訪れを強調するために用いられていると解釈することができた。また、冷たい「冬」から暖かい「春」への移行という季節の変化を単に表しているだけでなく、ここでは孤独の象徴としての「冬」から、この詩のテーマでもある愛の象徴として「春」への移行という心情の変化も表しているといえるのではないだろうか。

6行目：“lev det!”

この一文をそのまま訳すると「それを生きろ!」となるが、あまりにも直訳的で味気のない訳になったため、ローゼンダールがこの詩を書いた背景を考慮に入れながらより適切な訳を検討した。それはつまり“lev det!”と叫ぶこの声が、30歳年下のウルレクと恋に落ちたこの当時、彼にはすでに妻と三人の子どもがいたが、たとえ

誤った選択をしても後戻りは決してできない人生で、それまで自身が築いてきたものと自分が今心から望んでいるものとのほざまで苦悩の時期を過ごした末にどこからか聞こえてきたものであったということである。すると「それを生きろ！」よりも「人生は一度きりだ！」と訳す方が、当時の彼が置かれていた状況に合っており前者のような命令形の言葉よりも、後者のように背中を押すような励ましの意味合いを持つ言葉がこの場合には適切であると判断した。

#### ◆ 第2連

2行目：“vintrens, gamle, stive føl”

「子馬」”føl”という単語に、「冬の」”vintrens”，「年老いた，古い」”gamle”，「かたい，酔っ払った」”stive”がかかっているが，子馬が象徴する「若さ」に本来かかることのない「年老いた，古い」という形容詞が前置されていたため訳出しの際に検討を要した。しかし最終的に文字通りに訳すことが最適だという結論に達した。つまり，それは「長く続いた冬の寒さで身が固くなってしまった子馬」であり，この子馬が春になり牧草地に飛び出していく様子を表している。さらに，次の行を含むこの節は作者がこれまで一度も味わったことのなかった心から人を愛するという感情が，突如として目の前に現れたことを描写しているとも解釈できる。

#### ◆ 第3連

4行目：“næve”

この単語に関しては、「手のひら」あるいは「掌」と訳すかで思案したが，デンマーク語にも一般的な手のひらを表す”hånd”としばしば男性の大きく丈夫な手のひらを表す”næve”があるように，前者は”hånd”であり後者は”næve”に対応しているということに加え，ローセンダールが同性愛者でありこの詩がウルレクと恋仲にあったときに書かれたということを考慮すると，ここでは「掌」とすることが最適な訳であると考えた。ちなみに詩全体を通して，この”næve”のみがこの詩が男性への愛をうたったものであることの唯一の判断材料である。

### 3.3. この詩が持つメッセージ性

先述した通り，結婚式や葬式，パーティーなどのさまざまなシーンで幅広い世代に歌

われ、親しまれている ”Forelskelsessang” であるが、この詩が知られるようになった当時はビールについての描写がとりわけ教会において物議を醸した。しかし今日この詩が曲となってさまざまなシーンで歌われていることを考えれば、キリスト教界でタブー視されてきた描写をかき消してしまうほどのこの詩自体が持つメッセージ性に人びとが深く共感してきたということが読み取れる。そのメッセージは前節で検討した通り、第5連に込められているのであるが、敬虔なキリスト教徒の家庭で育ち、ローセンドール自身も信仰心が強いという事実を踏まえれば、この結論に達し、さらに歌い続けられているということはローセンドールだけでなく同性愛者の人びとにとっても大きな意味を持つことであると思われる。また、この作品がフォルケホイスコーレの歌集に掲載された年と同じ1989年にデンマークにおいて世界で初めて、同性カップルに異性カップルが結婚している場合に認められるものとほとんど同じ権利が認められる「登録パートナーシップ法」が作られたことから、時宜を得た作品であることがわかる。この詩はすべての境界を破る恋愛について書かれているものであり、このことは主なる神はたとえその形が同性愛であったとしても全ての人を祝福してくれるという彼の思想をよく表している。

#### 4. まとめ

今回取り上げたローセンドールの詩 “Forelskelsessang” は1989年以来、デンマーク国内におけるさまざまなシーンで歌われつづけている国民的な曲である。しかしこの詩が書かれた背景には敬虔なキリスト教徒でありながら同性愛者であるというローセンドール自身の苦悩があった。当時は彼と同じように信仰心が強い人々からの非難もあったが、今日のその受け入れられ方を見ればこの詩がもつメッセージ性は疑いもなく大きく多くの人に共感を呼ぶようなものであることが読み取れる。50歳にして人生において最大の決断を迫られた彼であるが、その際に下した決断はこの詩を通して彼だけでなく、他の同性愛者の人びとを含む全ての人に希望を与えたといえよう。

#### 参考辞書・辞典

DDO (=Den Danske Ordbog. Den Danske Ordbog. Copenhagen=Det Dansk Sprog- og Litteraturselskab). <https://ordnet.dk/ddo>

新谷俊裕, 大辺理恵, 間瀬英夫. 2009. 「デンマーク語固有名詞 カナ表記小辞典」,  
『大阪大学世界言語研究センター デンマーク語・スウェーデン語研究室』.

<http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/danish/dictionary/det%20hele.pdf>

インターネット資料

HØJSKOKESANGBOGEN. *Forelskelsessang*. Retrieved 8 1 2021:

<https://www.hojskolesangbogen.dk/om-sangbogen/historier-om-sangene/e-g/forelskelssang/>

(2021年1月28日最終確認)

Information. 2018. *Jens Rosendal brugte 50 år på ikke at vække opsigt. Så sprang han ud med >>Du kom med alt det der var dig<<*. Retrieved 8 1 2021:

<https://www.information.dk/kultur/2018/09/jens-rosendal-brugte-50-aar-paa-vaekke-opsigt-saa-sprang-kom> (2021年1月28日最終確認)

MarriageForAllJapan. 世界の同性婚. 一般社団法人 MarriageForAllJapan. Retrieved 18 1 2021: <https://www.marriageforall.jp/marriage-equality/world/> (2021年1月28日最終確認)

## N.F.S.Grundtvig の詩

堀聖我

Som forårssolen morgenrød

春の太陽の夜明けのように

Som forårssolen morgenrød  
stod Jesus op af jordens skød  
med liv og lys tillige;  
derfor, så længe verden står,  
nu efter vinter kommer vår  
livsalig i Guds rige.

春の太陽の夜明けのように  
主が大地の子宮から蘇る  
生命と光とともに  
それゆえ、世界が存在する限り  
今、冬の終わりとともに春が来る  
神々の国の至福の時

Som fuglekor i mark og lund  
lovsynger vår i allen stund  
med deres toner søde,  
så alle tunger , trindt om land,  
lovsynge dødens overmand  
i påske-morgenrøde!

畑や林の鳥たちの聖歌隊のように  
春がいかなる時も祝福してゆく  
その甘美な調べとともに  
全ての舌よ、至る所で  
死者の主を祝福せよ  
復活祭の夜明けに際して！

Som blomster alle står i flor,  
som skoven grønnes, kornet gror  
ved vårens kræfter milde,  
så blomster alt i Jesus navn  
og bærer frugt til folkegavn,  
som årle, så og silde.

花盛りの花々のように  
森が緑に染まるように、穀物が育つ  
春の柔らかな力によって  
神の名の下に花開く  
人々への恵みとなる果実が実る  
朝早く、そして夜遅くまで

## 1. 作者紹介

ニコライ・フレンズリグ・スィヴェリーン・グロントヴィ(Nikolaj Frederik Severin Grundtvig, 1783-1872)は、シェラン島南部の Udby で牧師の子として生まれる。ロマン主義時代の代表的な文学者、詩人および牧師であり、デンマークにおける政治、教育、歴史などに幅広く貢献した。デンマーク史において最も影響力の大きかった人物の1人で、特に Folkehøjskole の礎を築いた人物として高く評価されている。

当時デンマーク国内でラテン語が教育の領域で権威をもち、デンマーク語は国民の半数以上であった農民が使う無知な言語だとする認識に意を唱え、「生きた言葉」重視する思想をもつ。「生きた言葉」とは、人々の生活に根ざした、人々が実際に使う言葉でのことを指す。個人の生の具体的な面を記述する言葉こそが生きた言葉であり、個人の生きた言葉に込められた共有される感情を彼は詩と称した。

## 2. 詩の考察

この詩は題名からも分かるように春を謳った詩であり、グロントヴィが教会の礼拝のために書き上げた復活祭を意識した詩である。

第1連1文目は詩の題名と全く同である、「春の太陽の夜明けのように」というフレーズで始まる。続いて2文目は、単語を素直に訳すと「主が大地の子宮から立ち上がる」となるが、復活祭の詩であることを考慮して、「立ち上がる」を「復活する」と意識した。また、skød の訳出にも少し迷ったが、大地は「母なる大地」のように女性名詩として扱われることが多いため「子宮」が適切であると判断した。

3文目では、主が復活したことによって生命と光がもたらされる。ここでいう生命とは、とりわけ春に成長しその命を輝かせる植物たち、加えてその植物によって生かされる人間たちの命のことを指すと考える。そしてここでいう光とは、北欧の暗くて寒い長い冬に終わりを告げる暖かい春の陽光、そして辛い時期を乗り越えた人々の精神的な明るさ指すのではないかと考える。

4文目と5文目から、これまでの一連の流れはまさに季節の移り変わりのことであり、それはつまり主の復活と生命と光の到来は今までも何度も繰り返されてきたし、世界が続く限りこの先もそうであることを示唆している。

第1連目の最後は「神々の国の至福の時」という文で締め括られる。神々の国と聞くと初めは天上をイメージしたが、主が大地から復活することを考えると、神々の国とはつまり神々によって治められた場所であり、神々の恩恵によって生かされる人間たちの国でもあるのだと解釈した。

第2連1文目では、春の自然あふれる場所とそこで聞こえてくる鳥たちのさえずりを想起させられる。2文目の「春がいかなる時も祝福してゆく」という文で春



というものの力強さや影響力の大きさを感じた。たとえどんなに辛い時期、暗い冬、どんなに苦しい時であっても、春がやって来れば全てを塗り替えて祝福してくれるのだと。

3文目では、「甘美な調べ」という言葉がでてくる。「甘美な調べ」とは、前の文で登場した鳥たちの歌声やその後の文で出てくる人々の舌による歌、そして木々の新緑が擦れる音やその他の動物たちの声のような春に聴くことのできる、春のありとあらゆる自然の音のような具体的なものを指すのかもしれない。あるいは、「甘美な調べ」とは人間には知覚できない春のもつ不思議な力のような抽象的なものを指すのかもしれないし、もしくは具体的なものと抽象的なものの両方を指すのかもしれないと考えた。

4文目から6文目では、死者の主を祝福するために人々に歌うことを求めた文となっている。ここの訳出は特に難しいものの1つであったが、舌が祝福するとはつまり歌を歌うということであると解釈した。この詩が讃美歌であることを考えれば、祝福することと歌うことを結びつけるのは自然であると言える。そして最後の文の中に *påske* という単語で復活祭に関して直接言及しており、この詩が復活祭のためのものであることが改めて確認できる。

第3連では1文目から3文目を通して、花や木々や穀物のような多くの植物が春の訪れによって栄えてゆく様子が表現されている。そんな植物たちの中でも特にここで注目したいのは、人々の生きる糧となる穀物や果実である。5文目で述べられているように、それは「人々への恵となる」ものである。そしてそれらは「神の名の下に花開く」。つまり人々は神の恩恵を享受し、自然とともに生き、自然に生かされているのだと分かる。

身近な自然、それと共存し生きていく人間の営み、そしてそれをもたらしてくれる神への感謝こそグロントヴィがこの詩を通じて表現したかったものであると考える。神の復活、春の訪れ、植物の誕生と繁栄などといった描写が、復活祭というキーワードと綺麗に結びつけられて表現されていると感じた。神への信仰と自然の美しさや力強さ、それとともに生きる人間の営みが壮大に描写された非常に爽やかな詩であった。

## 参考資料

N. F. S. Grundtvig – Digte, salmer, biografi og liv. <https://www.udvalgte-ordsprog.dk/n-f-s-grundtvig-digte-salmer> (2021年1月28日最終確認)

N. F. S. Grundtvig, folk high schools and popular education. <https://infed.org/mobi/n-f-s-grundtvig-folk-high-schools-and-popular-education/> (2021年1月28日最終確認)

N. F. S. Grundtvig. Forfatterweb Bibliotek og undervisning.

<https://forfatterweb.dk/oversigt/grundtvig-n-f-s> (2021年1月28日最終確認)

Som forårssolen morgenrød. Højskolesangbogen. <https://www.hojskolesangbogen.dk/om-sangbogen/historier-om-sangene/s/som-foraarssolen-morgenroed/> (2021 年 1 月 28 日最終確認)

Gunnar Ekelöf の詩

後藤秋音

Ty natten kommer	夜が来るから
Ty natten kommer då lycka och olycka vilar i frid med varann	夜が来るから 幸せと不幸せは お互い安らかに眠る
Du ser hur skymningen faller snabbt som klockklang och fönster efter fönster tänds	あなたは時計の鐘のように あっという間に日が暮れて 窓に次々と明かりがともるのを見る
Därinne har de ätit sin spaghetti och utan en tanke på morgondagen sover de snart med varann	そこでは彼らがスパゲッティを食べ終えて 明日のことは考えず お互いすぐに眠りにつく
Ty natten kommer Det finns ingen morgondag: Det finns ingen stad	夜が来るから そこに明日はない: そこに街はない

(出典 : *Strountes*, 1955)

(後藤秋音 訳)

## 1. 作者紹介：Gunnar Ekelöf (1907-1968)

Gunnar Ekelöf は、スウェーデンの作家、詩人、翻訳家で 20 世紀のスウェーデン・モダニズム派詩人の第一人者である。ロマン主義的な詩や反詩的な詩、断片的で偶発的な詩など様々な詩作を試みた作家である。ストックホルムに株式仲買人の子として生まれ、家庭は裕福だったが、9 歳の時に精神病の父親を亡くし、困難な幼少時代を過ごした。この幼少時代のトラウマは彼の作品にも影響を与えた。若いころは、ペルシャ、アラビア、インドの文化や神秘主義に興味を持ち、ウップサーラ大学ではサンスクリット語とペルシャ語を学んだ。また 1929 年にパリへ渡り、音楽を学んだ。フランスのモダニズムに衝撃を受け、そこでの経験がのちに彼の作品のインスピレーションとなった。彼はシュールレアリスムとフランスの詩に興味を持ち、フランスの詩をスウェーデン語に訳すなど、翻訳家としても活動していた。1932 年に最初の詩集 *Sent på jorden* 『地球の遅くに』を発表した。この作品はシュールレアリスムの影響を強く受けており、その大胆な言葉遣いや予想外の比喩、タイポグラフィーの技法を用いた詩は当時のスウェーデンの詩において革新的だった。その後もいくつか詩集を出し、評価を受けた。1958 年にはスウェーデンアカデミーの会員に選出されるなど、スウェーデンを代表する詩人となった。

## 2. *Stroutnes* について

*Stroutnes* は 1955 年に出版された詩集である。*Stroutnes* はスウェーデン語の“strunt”を意味し、英語では‘nonsense’と訳されている。グロテスクなユーモアが特徴の詩集で、その後出版された詩集 *En Mølina-Elegi* (1960) と密接に関係していると言われている。*En Mølina-Elegi* 『水車エネルギー』は時間と時間の相対性について扱った詩集で、彼が出した詩集の中では比較的まとまりのある詩集である。

右の画像は Bonniers 社が出した *Stroutnes* の宣伝広告である。タイトルの下には「感動的で機知に富んだ驚くべき詩集」との紹介文と、アルムクヴィストの言葉が引用されている。「ナンセンスなことを書くことは難しい。信じられないほど、言い表せないほど難しい。それはほぼ人間の力を超越している。そして、人は誰もそのようなことに挑戦さえないと思うのだ」。



### 3. *Ty natten kommer* の分析

第1連の“lycka”と“olycka”は、幸せと不幸せという概念を擬人化したものであるととらえた。夜が来れば誰もが家に帰って休む。つまり、人間が日々感じる幸せと不幸せもこの時ばかりは穏やかに休む。この第1連から読者は夜の穏やかな様子を想像できる。

第2連になると“du”が登場する。この詩における“du”はこの街を外側から俯瞰する存在であると考えられ、その“du”が見ている街の様子がまた別の存在によって語られている。したがって読者は“du”の視点から街を見ることになる。“skymningen”とは夕暮れのこと、すでに薄暗い状態からあつという間に日が沈んで夜に近づいていくとともに窓に明かりがともっていく情景が目に浮かぶ。“klockklang”とは、おそらく街の教会にある時計塔の鐘が鳴る音であると考えられる。日が暮れていく様子を「時計の鐘のように」と表現するのは不自然な気がするが、ある時間になると鳴り響き再び静かになる鐘が、ある時間だけ美しい姿を見せる夕暮れの空があつという間に闇に包まれていく様子に重なるようにも思われる。

第3連で場面は街全体の様子から家の中の様子に切り替わる。“de”とは“du”が俯瞰している街の住人であり、ここでは彼らのごく普通の日常が描かれている。あえて「スパゲッティ」というありふれた食べ物を提示することで今日という日常が強調されている。“sover de snart med varann”は第1連の“vilar i frid med varann”に対応しており、夜の静けさと穏やかさが表れている。家に帰り、スパゲッティを食べて寝るといふ、この何気ない日常が第4連を際立たせることになる。

第4連でこの詩の雰囲気はがらりと変わる。これまではごく普通の日常が描かれていて何の違和感も抱かなかった。しかし突如「明日はない」「街はない」という言葉が登場し、読者は困惑する。いったい何があったのか誰もが考えるだろう。しかしその答えはどこにも書かれていない。

### 4. 考察

この詩は非常にわかりやすい単語で書かれており、第3連まではごく普通の日常を描写しているように思われる。日が沈み、家に帰り、夕食をとり、眠りにつく。誰もが明日が来ることを疑わない。目を覚ましたら街がなくなっていることなど考えもしない。しかし突然、明日も街もなくなる。「彼ら」にいったい何があったのか、考えられるのは、街の破壊と人々の死である。この詩が人々の死を扱っているとする場合、注目すべきは第1連である。第1連3行目の

“vila i frid” という表現は、墓石にも刻まれる言葉で、死を連想させるものである。これを考慮すると、幸せと不幸せが安らかに眠るということは人々の死を示唆しており、第4連に対応していると考えられる。その死がもたらされる理由は「夜が来るから」としか書かれていない。具体的に何が起こったのかは述べられていないが、夜になって眠るという行為が「死」に重ねられていると考えられる。

この詩に特徴的なのは、街を俯瞰しているのが「あなた」で、その「あなた」が見ている街の様子をまた別の誰かが語っている点である。おそらく多くの読者は「あなた」の視点からこの詩を読むだろう。「あなた」が眺める街の住人は「彼ら」で、読者は自分にとって何の関わりもない「彼ら」の様子を眺める。なぜこのような構造になっているのだろうか。「あなた」を街の住人の一人ではなく、街全体を俯瞰する立場に置くことにどのような効果があるのだろうか。考えられることは2つある。一つは「あなた」が俯瞰することで客観性が増すということである。この詩全体を通して「あなた」としての読者は、名前も知らない街のナレーション付きの映像を見ているかのような立場に身を置くことになり、その様子を客観的に観察して最後の部分を冷静に分析できる。もう一つは現実味が増すということである。もし「あなた」がこの街の住人として語られていたら、夕食にスパゲッティを食べない人は「あなた」になりきることができないかもしれないし、突然明日も街もなくなっても、今ここに自分が存在しているので、この詩の中の「あなた」は完全に架空の存在ということになってしまう。一方で街の住人を「あなた」とは関わりのない「彼ら」にすることで、あたかもこの世界のどこかにこの街が存在していたかのような印象を受け、現実味が増す。すると「彼ら」と街の様子を自分の生活や実在する街の様子にリンクさせることができるようになり、関わりのないはずの「彼ら」に親しみさえ覚え、最終部分での衝撃が増すことになる。そして、明日がないことも知らず、何も考えずに眠りについた彼らを見て、自分の生活を振り返るのである。

ごく普通の日常が続いていたのに、突然明日も街もなくなるなどあり得ない、ナンセンスだと言う人もいるかもしれない。しかし決してありえないとは言いきれない。この詩はそのことを読者に気づかせる意図があるのかもしれない。ナンセンスなことを書くことで、ナンセンスだからと言って無視してきたことの中にある重要なことを浮かび上がらせることができる。この詩の場合、それは当たり前のことの中に隠された「今日」という日常のかけがえのなさである。毎日同じことを繰り返していたとしても、それは唯一無二の「今日」であり、

二度と戻ってこない．当たり前だと思っていたものが突然消えてなくなるのが現実である．

#### インターネット上の資料

Gunnar Ekelöf Sällskapet <http://www.gunnarekelof.se/> (2020年8月2日 最終確認)

Litteraturbanken <https://litteraturbanken.se/författare/EkelöfG> (2020年8月2日 最終確認)

Bo Gustavsson. Ekelöfs barndom i nytt ljus. Upsala Nya Tidning  
<https://unt.se/kultur/litteratur/ekelofs-barndom-i-nytt-ljus-1811919.aspx> (2020年8月2日 最終確認)

Peder Svend Pedersen. ekelut.dk <http://www.ekelut.dk/> (2020年8月2日 最終確認)

Vilhelm Ekelund の詩

佐伯育美

Det snöar

雪が降っている

Det var midnatt. Lampan sjöd.

真夜中のこと。ランプが音を立てていた

Över boken jag lutad satt.

本に覆いかぶさるように私は座っていた

Då plötsligt spratt

突然私は飛び上がった

jag upp. Något ljud

何かが音を立てた

prasslande, lent och lätt

木の葉を擦るような微かで軽い音を

mot rutan fint, tätt...

窓に向かって、優しく絶え間なく...

Det snöar.

雪が降っている

Så tyst, så tyst är allt,

とても静かだ、すべてが静まっている、

och tysta träden stå,

沈黙した木々は佇み、

och mjuk och ljus och grå

空は柔らかく、明るく、灰色だ

är himmelen – och stilla.

—そして動かない

Och stilla det plötsligt var

それは突然動きを止めている

i själen djup och klar.

心の中で、そこは深くそして明るい

I tystnaden där ute

静寂の中、外では

något mot mig ler:

何かが私に微笑みかける

min barndom på mig ser.

子どもの私がこちらを見ている

(出典 : *In Candidum*, 1905)

(佐伯育美 訳)



## 1. 作者紹介：Vilhelm Ekelund (1880-1949)

1880年、SkåneのStehagに生まれる。子どもの頃家族でLundの近くに移り住み、Ekelundは聖堂学校(Katedralskolan)でラテン語、ギリシア語、ドイツ語、フランス語、英語を学ぶ。16歳頃から詩作を始め、1900年に最初の詩集『春風』*Vårbris*を発表。その後も次々に詩集を発表していくが、1906年の『夕暮れに輝くディシラム』*Dithyramber i Aftonglans*以降詩からは離れ、エッセイや箴言を書くようになる。作風としては、自由韻律で象徴的な抒情詩、自然や生活の描写を通した内的自己表現が特徴として挙げられる。これは当時先駆的であり、彼の作品がその後スウェーデン文学界に与えた影響は大きい。また、翻訳者としても高い評価を受けているEkelundは詩作をしていた頃から既に翻訳も始めており、時折他の言語のタイトルを付けた詩を書いていたように、Ekelundのオリジナル作品にも外国作品や自分が訪れた国からの影響が現れている。

## 2. 詩の分析

本作品が収録されている『捧げられしカンディドゥス』*In Candidum*はEkelundの第5作目の詩集であり、1901年から1905年までに書かれた詩をまとめたものである。タイトルの「カンディドゥス」とはラテン語で輝くような白を表す言葉である。「ヴェネツィア」“Venedig”という長篇作品が収められているように、1904年にヴェネツィアで過ごしたことに関する作品がこの詩集の多くを占めている。

「雪が降っている」“Det snöar”は、間に題と同じ“Det snöar(雪が降っている)”という一行を挟んで2連に分かれた構成になっており、同詩集の他作品と同様に定型にとられない自由詩である。第一連、第二連と共に1行空けて2行ずつを1組として韻律が整えられている。

本作品では「私」を通して静かな雪の降る夜が描き出されているが、第一連と第二連でその表現方法には明確な違いが存在する。まず挙げられるのが時制の違いである。第一連は過去形、7行目“Det snöar.”以降からは現在形になっている。したがって詩の前半と後半は状況こそ似ているが異なる場面である。時間が異なるだけで「私」のいる場所や視点は同じということもあり得る。次に中心となる感覚の違いがある。第一連は“sjöd”や“prasslande”といった音に関する言葉が多用されており聴覚に焦点が当てられている。一方第二連は“tyst”や“tystnaden”が繰り返し使われることによって静寂が強調されている。その代わりに窓の外や空の様子が詳細に描写され、この連では視覚が重視されていることがわかる。

## 3. まとめ

本作品において、雪は穏やかで優しいものだと「私」は捉えている。第一連は子どもの

頃の「私」、第二連は現在の「私」を視点に置いているが、どちらも雪に対しては好意的である。2 連を結びつけている「雪が降っている」という一文は、過去と現在の「私」が雪に気づいて誰にともなく呟く言葉である。この時の「私」は雪を見て穏やかに微笑んでいたと思われる。15、16 行目で「私」に微笑みかけたのは子どもの頃の「私」とあるが、実際に見えたのは窓に映った自分の顔だったのではないだろうか。子どもの頃と同じ表情で「私」は窓の外を眺めていたのである。時が過ぎるにつれてたとえ似たような場所にいたとしても感じるものは変わってしまうだろうが、ふと降る雪に意識を向けた時過去の「私」と現在の「私」は同一の存在として重なる。この「雪が降っている」という一言は第一連と第二連、即ち「私」の過去と現在を一貫性あるものとして結びつける役割を果たしているのである。

#### インターネット上の資料

Litteraturbankens skola. *Vilhelm Ekelund, Det snöar*. <https://litteraturbanken.se/skolan/poesi-forfattare-vilhelm-ekelund-det-snoar/> (2020 年 8 月 3 日最終確認)

Svenska Akademien. *Vilhelm Ekelund, Samlade dikterII*. 2004.

Litteraturbanken. *Vilhelm Ekelund, Introduktion*.

<https://litteraturbanken.se/f%C3%B6rfattare/EkelundV> (2020 年 8 月 3 日最終確認)

Litteraturbanken. *Svenskt översättarlexikon, Vilhelm Ekelund*.

[https://litteraturbanken.se/%C3%B6vers%C3%A4ttarlexikon/artiklar/Vilhelm\\_Ekelund](https://litteraturbanken.se/%C3%B6vers%C3%A4ttarlexikon/artiklar/Vilhelm_Ekelund) (2020 年 8 月 3 日最終確認)

Verner von Heidenstam の詩

水崎千尋

Paradisets timma

När människorna sova  
vid sommarnattens sken  
och tusen röster lova  
sin fröjd från gren till gren,  
då purpras lingonriset  
av stilla skyars gull;  
då hägrar paradiset  
än över jordens mull.

Du äng, låt kalkar glimma  
kring älvans lätta hä!

Du paradisets timma,  
din dagg gjut i vår själ!  
Än jublar fågelsången  
kring gryningsljusa sund  
så klar som första gången  
i tidens första stund.

楽園の時

夏の夜の光で  
人類が眠っている頃  
枝から枝への喜びを  
千の声が讃える頃,  
雲の穏やかな金色で  
赤く色づくリンゴンベリーの茂み  
楽園はいざなう  
肥沃な大地の上へと。

草原よ、花をきらめかせたまえ、  
妖精の軽やかなかかとの周りで！  
楽園の時よ、  
汝の滴を我々の魂の中に注ぎたまえ！  
まだ鳥は歓喜の歌を奏でている  
朝焼けした海峡の周りで  
はじまりのときのようにとても明るいのだ  
時のはじまりの瞬間で。

(出典： *Nya dikter*, 1915)

(水崎千尋 訳)

## 1. 作者紹介

ヴァーネル・フォン・ヘイデンスタム (Verner von Heidenstam, 1859-1940)は作家、詩人、小説家。19世紀におけるスウェーデン文学の中心人物である。1912年からスウェーデン・アカデミーの会員に選出され、1916年にセルマ・ラーゲルルーヴに次いでノーベル文学賞を受賞した。新ロマン主義的な作風で、スウェーデンの人物、生活、伝統などを時に愛国的な視点から情熱的に描いたものが多い。評論 *Renässans*(1889)や *Pepitas bröllop*(1890)において彼は18世紀の自然主義に反発し、暗くて厭世的(*mörk och livsfientlig*)と評している。その代わりに彼は詩作には美しさや色彩を見出そうとした。

彼は1888年、詩集『巡礼と放浪の歲月』*Vallfart och vandringsår*でデビュー。この詩集は自身が結核の療養で南ヨーロッパやアジア諸国を旅したことをもとに創作されている。またこの処女作は批評家の Georg Nordensvan や劇作家の Gustaf af Geijerstam から称賛され、これによって彼は自然主義文学に対して新ロマン主義の旋風を巻き起こし、北欧の文学界に躍り出ることとなった。『詩集』*Dikter*(1895)出版のころから次第に愛国的傾向を帯び、様々な作品を書いた。

## 2. 『新詩集』*Nya dikter* について

『新詩集』*Nya dikter*(1915)はヘイデンスタム最後の作品。壮大で力強い詩集で、形式は古典的で純粹、かつシンプルで飾り気がなく、しばしば散文的である<sup>1</sup>。また、作曲家の Wilhelm Stenhammar によって曲がつけられスウェーデン第二国歌となった「スウェーデン」“Sverige”も同詩集に納められている。

## 3. “Paradisets timma” の解釈－「楽園の時」とは

タイトルにもある「楽園の時」とは何を意味するのか。“gryningsljusa”という単語からして「夜明け」を意味すると考える。またこの夜明けには現実の「風景としての夜明け」と比喩的な「世界の夜明け」のふたつの意味を重ね合わせてみることが出来る。

まず「風景としての夜明け」だが、この詩の全体を通して夜が明ける風景を描写している。1, 2行目ではこの詩を読んだのは夏であること、星の光の下で人々が眠っていることを明かす。3, 4行目では“tusen röster”が登場する。ここはスウェーデンへの愛国心の強いヘイデンスタムからしても、スウェーデンの国鳥に二度選出された<sup>2</sup>クロウタドリのさえずる声とみていいだろう。クロウタドリはメロディーの

<sup>1</sup> Nordisk familjebok, Ugglepplagan. 36. Supplement. Globe-Köves, 1924 ”Heidenstam”, p323

<sup>2</sup> 1962年と2015年

ような美しい鳴き声を持つ鳥で、夜明け前から早朝に鳴く鳥である。また木々や茂みに巣をつくり、虫や木の実などを食べる鳥だ。クロウタドリが登場することから、ここで夜明け付近の時間に移ったことが分かる。5, 6行目では地平線の下からもれる朝日を反射して雲がぼうっと金色に色づきリンゴンベリーの茂みはその光を受けて光る様子を鮮やかに描写しつつ、日の出が近いことを予感させる。続いて第一連最後の7, 8行目では「樂園はいざなう 肥沃な大地の上へと」と訳したが、ここでは樂園、つまり夜明けが太陽を地平線の上に浮かび上がらせるような情景をイメージしたい。1行目からここまでで、時間は夜から早朝へ移り変わっているのだ。第一連では一点の視界から夜が明けていく様子を2行ずつテンポよく描写したものが、第二連ではさらに視界を草原や海に広げている。草原の花に朝露がきらきらと輝き、妖精が軽やかに舞っているような第二連最初の2行は繊細さとファンタジー性が感じられ、ヘイデンスタムの新ロマン派たる特色が窺える。そして最後の4行で海峡を朝焼けが包む描写でもって、ヘイデンスタムは「樂園の時」を壮大に描き切った。

続いて「世界の夜明け」という解釈だが、先ほどのスケールの大きさという点では被ってくる部分でもある。最後の2行で朝日から“*tidens första stund*”を想起していることが分かるが、これは世界の時が始まった瞬間、つまり世界の始まりを表していると考えられる。このように考えたとき、例えば8行目の「肥沃な大地」は人の手の加えられていない豊かな土壌という意味を持つてくる。また、全体を通した草花や鳥や妖精は目覚めているが人類は眠っているという描写は地球上でヒトだけがない創成期を示すのではないだろうか。3行目の「枝から枝へ」という表現は進化の系統樹を表しているようにも見える。

最も解釈が難解だったのは第二連の3, 4行目だ。「樂園の時」つまり「夜明け」の“*dagg*”を我らの魂に注ぐとは何を表しているのか。“*gjuta*”には「活力を注ぎ込む」という意味や「溶解した塊を型に流し込み固体を生み出す」という意味がある。そのためまずイメージとして、武器を鑄造するように、人間の魂の入れ物に生命の源のようなものを注ぎ入れる画を浮かべた。また「太陽」というキーワードや、世界のはじまりから連想される「ビッグバン」「マントル」といったモチーフからも高温でドロツとした鑄造のイメージと重ねられるように感じた。まとめるとこの箇所は、夜明けの太陽を創世の祖だとみなし人類の誕生を願っているという解釈に収まっている。とすると、「樂園」が示す「夜明け」には「世界の夜明け」の他に「人類の夜明け」という意味も付随していると考えられることができる。

#### 4. おわりに

クロウタドリが夜明けに歌う歓喜の歌は、「一日のはじまり」そして「世界のはじまり」や「人類のはじまり」を讃えているのだろう。「楽園の時」“Paradisets timma”からは様々な「夜明け」をテーマとした壮大さが伺える。同時に、夜明けの美しい自然描写からスウェーデンの自然に対するヘイデンスタムの敬愛も読み取ることができる。19世紀スウェーデンにおいて新ロマン主義の作家として文壇に躍り出で、愛国心を持って作品を描いてきたヘイデンスタムの最後の詩集にふさわしい作品であると言えるだろう。

#### インターネット上の資料

Projekt Runeberg Nordisk familjebok, Ugglesupplagan. 36. Supplement. Globe-Köves, 1924. <http://runeberg.org/nfcp/0182.html> (2020年7月30日最終確認)

Litteraturbankens skola

[https://litteraturbanken.se/skolan/poesi-forfattare-verner-von-heidenstam-om/?preview\\_nonce=11125b0d78](https://litteraturbanken.se/skolan/poesi-forfattare-verner-von-heidenstam-om/?preview_nonce=11125b0d78) (2020年7月30日最終確認)

Litteraturbanken.

<https://litteraturbanken.se/f%C3%B6rfattare/HeidenstamV/titlar/NyaDikter/sida/1/etext> (2020年7月30日最終確認)

Fageln.se

<https://fageln.se/art/koltrast.aspx> (2020年7月30日最終確認)

Vivara Naturprodukter

<https://www.vivara.se/fagel-fakta/koltrast> (2020年7月30日最終確認)

Aftonbladet.

<https://www.aftonbladet.se/nyheter/a/ngE3RQ/faglarna-sjunger-tidigt-i-stadens-ljus> (2020年7月30日最終確認)

Månen

Månen stryker med handen milt över ögonen,  
väcker mig djupt i natten. Ensam bland sovande  
lägger jag ved på glöden, pysslar med rykande trä,  
rör mig bland skuggorna tyst, skuggor fladdrande högt  
över de bruna stockarna, prydda  
rikt med blänkande pimpeldon...

Varför väckte du mig? Ensam bland sovande,  
ryggar vända mot elden, öppnar jag dörren tyst,  
går kring knuten i snön, trampar i tussarna, ser  
månsken lockande kallt över sjön...

月

月が優しく目を撫でて、  
夜更けに私を起こす。眠っている人の中に一人  
薪をくべ、くすぶる木材から手が離せず、  
私は影の間で静かに動く、影は高くはためき  
茶色い薪の上、飾り付けられている  
きらきらと輝くジグで豪華に...

どうして私を起こしたんだい？ 眠っている人の中に一人  
火に背を向けて、静かにドアを開ける  
雪の中、角を曲がり、雪塊を踏み、見るのだ  
月明かりが湖の上で冷ややかに誘惑しているのを...

(出典 : *Sorgen och stjärnan*, 1936)

(藤原翠 訳)

## 1. 作者紹介：Gunnar Ekelöf (1907-1968)

Gunnar Ekelöf は、スウェーデンの作家、詩人、翻訳家である。1958 年からはスウェーデンアカデミーのメンバーにもなった。彼は 1907 年にストックホルムで生まれる。父は株式仲買人で、裕福な幼少期を過ごした。Ekelöf は、ウプサラ大学で東洋の言語を学び、その後パリで音楽を学ぶ。そして、フランスの詩やモダニズム、シュールレアリスムに大きな影響を受けた。

1932 年に詩集 *sent på jorden* 『遅くに地球の上で』でデビューする。シュールレアリスムに強く影響を受けたその詩集は、当時の批評家たちには厳しく批判された。続いて出された詩集 *Dedikation* 『献身』(1934)、*Sorgen och stjärnan* 『悲しみと星』(1936)、*Köp den blindes sång* 『盲人の歌を買え』(1938)は好評価を受けたが、しばらくシュールレアリスムから離れていた Ekelöf 自身は後にこれらの詩集をうわべだけのものだと感じた。1941 年に出した詩集 *Färjesång* 『渡し船の歌』は Ekelöf が詩人として躍進するきっかけとなった。その詩集の理論的で説得力のある筆致は、後のスウェーデン詩人たちにも影響を与えた。晩年には、東洋やビザンツの歴史への関心から 3 つの詩集を出した。1968 年にストックホルムで亡くなる。

## 2. 作品紹介

“Månen” は詩集 *Sorgen och stjärnan* に収録されている。批評家たちはこの詩集に対して良い評価を与えたが、Ekelöf 自身はうわべだけの詩だとしている。また、この詩集は Ekelöf がシュールレアリスムから離れていた時期に書いたものとも考えられているため、他の作品とは異なる印象が感じられるかもしれない。

## 3. 作品分析

この詩は、夜の闇の中の光の描写が印象的である。月の光、暖炉の火の明るさ、それらを反射するジグの光の三つに注目して分析する。

詩の題名にもなっている「月」が「私」を照らす様子から始まり、「月」が「私」を魅了している様子で終わる。ここでの特徴のひとつは、「月」だけが擬人化されているようであることだ。まず、一行目では月明かりの様子が「優しく目を撫で」という月の動作として表現されている。これは月の明かりが「私」の閉じている瞼の上を照らしている様子だと言える。「撫でる」ということから、雲の流れか何かによって月の光がゆっくり動いていることがうかがえるだろう。詩の最後では、月明かりが湖の上で冷やかに誘惑する様子が描かれる。“lockande (引きつける)” という表現は無生物にも使われるが、“kallt (冷たく)” と形容されることで、どこか擬人的な表現だと感じられる。月が題名になっていることに加え、月の描か



れ方が擬人的で他のものと異なることから、「月」の様子やそれに対する「私」の感じ方がこの詩の主となるものであると考える。

暖炉の火の様子は直接的には描かれないが、薪をくべるのに忙しくしているという描写から火の様子が想像できる。また、影が高くはためいている様子からは、暖炉の火が風によって大きく揺れていることがわかる。冷ややかにゆっくりと照らす月に対して、暖炉の火は暖かく、動きがある。この詩において、暖炉の火は月と対照的とも言える役割を担っているのではないか。

第一連の最後には、“pimpeldon (ジグ)”が出てくる。これは釣り道具の一つである金属の擬似餌だと考えられる。ここでは、暖炉の火あるいは月の光を反射してジグが影の中できらきらと輝く様子が描かれている。ジグが壁にかけられているのか、暖炉の上に置かれているのかは分からないが、“rikt (豪華に)”とあることや、“pimeldon”が複数形であることから、けっして少なくない個数のジグが光を反射させているのだと考えられる。金属製の冷たくきらびやかな光が、月の光とも暖炉の火とも異なる効果を与えていると考える。

#### 4. まとめ

この詩は静かな夜の情景を視覚的に美しく描いている。第1連の最後のジグが詩全体の中で何を表しているのか疑問が残るところであり、Ekelöfによるシュールレアリスムを理解することが難しかった。詩全体を通して数種類の光が描かれるが、それらの美しさが静かな夜に一層際立って感じられるだろう。

#### 使用テキスト

“Månen”, SORGEN OCH STJÄRNAN. GUNNAR EKELÖF-SÄLLSKAPET.

<http://www.gunnarekelof.se/ekelof/sorgen-och-stjarnan/> (2020年7月24日最終確認)

#### インターネット上の資料

Gunnar Ekelöf (1907-1968), Introduktion. Litteraturbanken.

<https://litteraturbanken.se/f%C3%B6rfattare/Ekel%C3%B6fG> (2020年7月24日最終確認)

Gunnar Ekelöf, Albert Bonniers Förlag.

<https://www.albertbonniersforlag.se/forfattare/13351/gunnar-ekelof/> (2020年7月24日最終確認)

Under tryck

お  
庄されて

Den blå himlens motordån är starkt.  
Vi är närvarande på en arbetsplats i darning,  
där havsdjupet plötsligt kan uppenbara sig -  
snäckor och telefoner susar.

Det sköna hinner man bara se hastigt från sidan.  
Den täta säden på åkern, många färger i en gul ström.  
De oroliga skuggorna i mitt huvud dras dit.  
De vill krypa in i säden och förvandlas till guld.

Mörkret faller. Vid midnatt går jag till sängs.  
Den mindre båten sätts ut från den större båten.  
Man är ensam på vattnet.  
Samhällets mörka skrov driver allt längre bort

青空を機械音が響もす。  
私たちは振動する仕事場にいる。  
突如海底が姿を現すかもしれないー  
貝と電話が囁く。

美しいものは、横顔だけを見せて行く。  
畑に密集した穀物、黄色い流れに種々の色。  
頭から不安の影が吸い出されていく。  
影は穀物に這い入り、黄金に変わらんと願う。

夜空が落ちてくる。真夜中、ベッドへ向かう。  
大きな船から小さな舟が放たれる。  
海上、ひとりきり。  
社会の暗い装甲が、遙か彼方へ去っていく。

(出典 : *Klanger och spår*, 1966)

(荒田憲助 訳)

## 1. 作者紹介：Tomas Tranströmer (1931～2015)

ストックホルム出身の詩人。2011年にノーベル文学賞を受賞。作品は60以上の言葉に翻訳されている。日本語訳はエイコ・デューク訳『悲しみのゴンドラ』*Sorgegondolen*(1996)が存在する。

ストックホルム大学で心理学や文学に触れる。1954年『十七の詩』*17 dikter* でデビュー。1990年に脳卒中により言語障害を患うが、以降も筆をおくことはなく*Fängelse*『収監所』(2002)、*Den stora gåtan*『大きな謎』(2004)と詩集を発表。病の影響は作品にもみられ、作品は以前と比べて短くなり、結果的により洗練された形式で描かれるようになった。

2011年のノーベル文学賞選考理由は「凝縮されたイメージを通して、新鮮な形で現実を描き出した」ことである。

彼の重要な関心としては自然と音楽が挙げられ、作品にも大きな影響を与えている。

## 2. 作品の分析、解釈

この「圧されて」「Under tryck」も例に漏れず、自然が存在感を放つ作品となっている。特に印象的なのは、聞こえてくる音である。人間の社会と比べて、自然の出す音は極めて小さい。

第一連は、騒がしい我々の日常から始まる。主語に一般人称の *man* や作者自身の *jag* ではなく一人称複数の *vi* が用いられているから、やはり「作者の」ではなく「我々の」日常という印象で、読者も詩の中に巻き込まれていく。青い空を我が物顔で飛んでいく飛行機の出す大きな音が、職場のオフィスを揺らす。この状況こそが、タイトルにある「圧」「tryck」であるのであろう。場面は海の底に飲み込まれ、電話と貝の囁き声を機に意識が自然の方へと向けられていく。オフィスが水底になってしまえば飛行機の音は聞こえず、さっきまで騒々しくなっていた電話の音もくぐもり、大人しく聞こえる。

第二連に入ると、海の青に染まっていた視界が黄金色で覆われ、「圧されて」いた状況で頭を占めていた不安は吸い出されていく。この場面で聞こえるのは、黄色く実った穀物が風に撫でられて互いに擦れる微かな音だけである。第一連で感じたストレスはなく、静かな景色が目に浮かんでくる。

第三連では、夜が訪れ、人間の社会も静かになる。作者にとって、夜とは海なのであろう。広い海の上、ひとりで小さなボートに揺られながら感じる静けさが、夜の静寂に重なる。日々の暮らしの中で、騒々しい人間社会という「大きな船」から

離れ、「小さな舟」で穏やかに過ごせる唯一の場所として夜が描かれている。

以上のように、音それ自体が直接述べられているのは冒頭のみだが、全体を通して音の存在が感じられる。これにより、騒々しい我々の日常への倦怠感、静かな自然の世界への憧憬、そして静かで広い海のような存在としての夜が印象的に描かれた作品である。

### 3. おわりに

Tomas Tranströmer は、やはり詩人である。「みえてはいるが誰もみていないものをみえるように」してくれる。

様々なものが発明され、生活が発展していく中で、みなが見るのをやめてしまったものに彼は目を向け続けていた。この詩が書かれてから半世紀、我々は静けさからも孤独からも目を背けている。耳にはめられたイヤホンはいつも音楽を流し、夜になってもインターネットは孤独を許さない。本当はすぐそこにあるのに我々が見てこなかった静寂と孤独のもつ優しさを見えるようにしてくれるこの作品は、紛れもなく詩であるというほかはない。

インターネット上の資料

The Nobel Prize organization. *The Nobel Prize in Literature 2011*.

<https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2011/transtromer/facts/> (2020年8月1日最終確認)

Önskenatt

Om någon stjärna lossnar  
och segnar vit genom luften,  
då fyller hon, sägs det, var bön, som når  
den korta glimrande banan.

Jag väntar och väntar. Det är april,  
en ljum och lyhörd natt i april,  
då gräset växer och stjärnorna lyssna -  
de gå så lugna i natt sin väg,  
och ingen enda snavar och faller!

Men om jag somnar, så gör det allsintet:  
sliter en stjärna sig lös i natt,  
så måste hon känna min bön, var hon sjunker,  
fastän jag sover -  
ty hela den tysta, tysta natten  
är hela den vida, vida rymden  
alldeles full av min enda önskan!

## 願いの夜

星々がほどけて  
空気の間を白く落ちていくと、  
願いは叶うと言われている、  
その短くキラキラした道の元へ届く全ての願いを。

私は待ち続ける。四月、  
生暖かく、音の澄んだ四月の夜、  
草は生い茂り、星たちは耳を傾ける一  
夜の道をゆったり進み、  
誰も躓いたり落っこちたりしない！

しかし私が眠りについたとしても、何にもならない—  
星は夜に解き放たれ、  
星々は私の願いを感じなければならない、星々が沈んでいくところで、  
たとえ私が眠っていたとしても。  
そう、その静かな、静かな一晩中  
広い、広い空間全てが  
私の唯一の願いでいっぱいだから！

(出典：Moln, 1922)

(吉良美祐 訳)

## 1. 作者紹介：Karin Boye (1900-1941)

1900年10月26日ヨーテボリに生まれた。父 Fritz は当時保険会社で働いており、家庭は裕福だった。1909年にストックホルムへ引越し、この頃から詩の制作を始める。1921年からウプサラ大学で北欧語、ギリシャ語、文学史を学び、その後1928年まではストックホルム大学で歴史を学ぶ。在学中の1922年に処女詩集『雲』*Moln* を発表する。その後、『かくされた土地』*Grömda land*, 『炉』*Härdarna* を出版し、詩人としての地位を確立した。学生時代から左翼運動に加わり、修士学位を取得後、所属する社会主義・反ファシズム団体クラルテ(Clarté)の機関紙の編集者として仕事をする。1929年、同団体であった Leif Björk と結婚。1931年クラルテのメンバーと共に雑誌 *Spectrum* を創刊する。この雑誌は当時のスウェーデンに現代的な思想をもたらした大きな影響を与えた。同年スウェーデンの文学アカデミーの一員となり、初めての小説『アスタルテ』*Astarte* で北欧小説賞を受賞した。1932年に離婚し、1933年までドイツに滞在する。滞在中にその後の伴侶となったドイツ人の女性と出会う。1934年にスウェーデンへ戻り、小説を次々と発表し、1935年代表作である詩集『木のために』*För trädets skull* を発表する。1940年には代表的な小説『カロカイン』*Kallocain* を出版し、現在数か国語に翻訳されている。1941年4月睡眠薬によって自殺する。その後『七つの大罪 その他の遺稿特集』*De sju dödssynderna och andra efterlämnade dekter* が出版される。

## 2. 作品について

第一連目では流れ星の様子が描かれている。“den korta glimrade banan” は星が落ちていった軌跡であり、流れ星の尾を示していると考えた。日本でも知られている、流れ星が願いを叶えるという言い伝えは、キリスト教文化からきており、北欧でも共通している。1行目の“lossnar” という単語は「問題を解決する」という意味でよく使われる語だが「解かれる、解放される」という意味から「ほどける」という訳を当てた。3行目には“hon”と出てくるが“hon”は願いを叶えるということから、おそらく“hon”は星を指しているだろう。星が満たす又は埋めるということから、願いを叶えるとした。

第二連目の前半では冬がようやく終わり、暖かくなり始める様子が描かれている。1行目で“april(4月)”と出てくるが、冬の寒さが厳しい北欧では、草などの植物をはじめとする生命が芽吹く春は希望に満ちている。よって自然のエネルギーが盛んな春と願いを関連づけていると考えた。後半では、星々が輝きながら夜の時間が過ぎていく様子が描かれている。3行目の“lyssna”と“gå”は現在形ではなく、不定詞と同じ形をとっている。これは主語が複数の1人称と3人称の場

合、現在形は不定詞と同じ形になるという昔の変化形で、その前の主語である“gräset”は単数であることから“gå”の主語“de”は“lyssna”と共通して“stjärnorna”であることがわかる。最後の2行では星空が進んでいく様子が、星々が歩いているように比喻表現を用いて表現されている。この詩における私は願いを叶えるために流れ星を待っているが、星々は全く落ちてこない。私が待ち続ける様子と生暖かい4月の夜の様子が描かれている。

第三連では私が眠った後が描かれている。ここで再度“hon”が出てくるが、“hon”が沈んでいくところで私の願いを感じなければならないということから、やはり“hon”は星であると解釈できるだろう。また、「広い、広い空間」が私の願いで満たされ、「彼女＝星」が沈んでいくところに私の願いが届いているということから「広い、広い空間」は夜空全体のことであると考えた。私が眠っていて流れ星を見ることができなくても、夜空全体が願いでいっぱいなので、星は私の願いを叶えてくれる。このような思いで一途に祈る私の姿が想像される。

使用テキスト

<https://www.karinboye.se/verk/dikter/dikter/onskenatt.shtm>

インターネット上の資料

Helgeson, Paulina. Karin Boye-Introduktion. Litteraturbanken.

<https://litteraturbanken.se/f%C3%B6rfattare/BoyeK/presentation> (2020年5月23日最終確認)

Karin Boye. Albert Bonniers Förlag.

<https://www.albertbonniersforlag.se/forfattare/6668/karin-boye/> (2020年5月23日最終確認)



Karin Boye の詩

山口祐奈

Allt, allt jag ägde...

私のもの全て...

Allt, allt jag ägde  
var ditt mer än mitt.  
Allt jag vackrast ville  
var ditt, ditt.

全て、私のもつもの全てが  
私のものというよりあなたのものだった。  
私が望んだもの全てが  
あなたのものだった。

Högt med dig jag talade  
vad ingen i världen vet.  
På ändlösa vägar  
var du min ensamhet.

大きな声であなたと話した  
世界中の誰も知らないこと。  
終わりのない道で  
あなたは私の孤独だった。

Låg jag vaken om natten  
och tänkte ingenting,  
andades, kände jag dig, dig.  
Du var runtomkring.

私は一晩中眠らずにいた  
けれど何かを考えることはしなかった、  
呼吸をし、あなたを感じる、あなたを。  
あなたに包まれていた。

Livlöst är livet,  
där inte du är kvar.  
Världen är ett väldigt skal,  
Som ingen kärna har.

死んだも同然の人生、  
そこにはもういない。  
この世界は殻でできていて、  
中身は何もない

(出典 : *Härdarna*, 1927)

(山口祐奈 訳)

## 1. はじめに

筆者がこの詩人に興味を持ったのは10カ月のスウェーデンでの留学の際に、「最も“スウェーデン”らしい詩人は誰だと思う」という私の問いにクラスメイトの一人が彼女を挙げたことによる。そのクラスメイト曰く、カーリン・ボイエ(Karin Boye)の詩は難しい単語を使わないながらも自然を愛する心を持ち、彼女が初等教育を受けていたころには教科書にも登場したという。実際にスウェーデンで図書館を訪れば彼女の詩集はいくつも並んでいる。彼女の作品は詩に留まらないが、その中のいくつかの作品は他言語に翻訳されるまでに至っていることから彼女もスウェーデンを代表する作家の一人だと言えるだろう。

本稿では詩人カーリン・ボイエの紹介と、彼女の詩集『炉』*Härdarna* に所収の詩、「私のもの全て…」“Allt, allt jag ägde…”について考察をしていく。

## 2. 詩人 Karin Boye (1900-1941)について

カーリン・マリア・ボイエ(Karin Maria Boye, 1900-1941)はスウェーデンの詩人、小説家である。1900年にヨーテボリにて生まれる。アリングソースの近くで1941年に自殺。彼女の両親はリベラルな半軍国主義者であった。1920年にウプサラ大学にて勉学に励み、1922年に初めての詩集『雲』*Moln* を上梓。卒業後はスウェーデン王立アカデミーなどから文学者や芸術家に与えられる奨学金を受けて、海外各地で学んだ。ストックホルムの単科大学で1928年に哲学の分野において学位を取得。1929年に結婚するもその3年後に離婚。彼女は教師として働く傍ら、雑誌スペクトルムの編集メンバーでもあった。また、週刊誌の仕事にも携わっていた。1931年にはドンニーエという文学の学究的組織に選出された。

彼女が影響を受けた人物としてはドイツ連邦出身のフリードリヒ・ニーチェやアルトゥル・ショーペンハウアーが挙げられる。フリードリヒ・ニーチェ(1844-1900)はドイツ連邦、プロイセン王国の実存主義者であり、超人という概念や「神は死んだ」などで現在の日本でもよく知られた哲学者でもある。後者のアルトゥル・ショーペンハウアー(1788-1860)はドイツ連邦、フランクフルト・アム・マインの哲学者であり、彼もまたニーチェと同じく実存主義者である。彼は意志の肯定と否定を行い、厭世観を持っていた人間として知られている。

この2人に共通する実存主義とは「実存は本質に先立つ」という考えに代表される、普遍的・必然的な本質存在に相対する現実存在の優越と現実世界の肯定について考察する哲学の領域における一種の学派である。実存主義者は人間の実存について考察するため厭世観をもつショーペンハウアーのように悲観的発想が生まれやすいと言われている。また、ボイエはヴァルムランドの美しい自然や自身の子ども時代の環境を主に扱い、詩を創作したグスタフ・フルーディング(1860-1911)やドイツにて誕生したものの牢獄生活を経てスウェーデンの南方に移り住んだ作家ヴィルヘルム・エーケルンド(1880-1949)の作品にも影響を受けているとされている。

北欧文学史の観点から言えば、ボイエは最も文学思潮が多様化した 20 世紀スウェーデン文学の第 2 世代に位置付けられる作家である。この時代に起きた社会の変容は様々な人の生活に大きく影響した。時にはそれは悲劇となり、宗教や耽美主義、懐疑主義に向かうものも見られた。その中でボイエの属するルンド文学派は明敏でアイロニカル、かつ懐疑的であり、貴族社会の絶望者とプロレタリア文学の新人作家のちょうど中間にいる。そのルンド文学派のクラルテ・グループの中心にいるボイエは表現主義を越えた向こうに人生の美を賛え、絶対的なものの予感を賛えるためのパセティックで素晴らしく柔軟な調子を見出す術を心得ていた。

### 3. 詩の分析

彼女の詩や散文は初期にはシンプルでリズムカル、明確なものが多く見られたが後により高度なものへと発展する。今回取り扱う詩は 1927 年に出版された詩集に収録されたものであるため、比較的初期の頃に制作されたものだといえる。

『炉』*Hårdarna* は 1927 年に出版された、『雲』*Moln* (1922) や『隠された土地』*Gömda land* (1924) に続くボイエ 3 作目の詩集である。

今回扱う詩「私のもの全て…」“Allt, allt jag ägde…”については、前述の通りシンプルな作品が多かった初期の頃に制作された作品群の中でも特にシンプルな単語選びが際立つ作品だといえよう。詩を読めばこれがボイエの詩でよく扱われていたテーマである、スウェーデンの自然について扱った詩でないことは明白である。ひどく哲学的でありながらも同時に愛についてうたったこの詩全体に登場する「あなた」(du) は詩のテーマともいべき存在であり、「あなた」を失った「私」(jag) の寂寥感が伝わる作品である。本項ではこの“du”に焦点を当てて詩を論じていく。

この詩は 4 行 4 連で構成された詩であり、1 連毎に 2, 4 行目で韻が踏まれている。また、表現としては「あなた」と「世界」について比喩が使われている。その比喩において「あなた」は「私の孤独」、「世界」は「殻」である。一般に強調の意味で使われる比喩がこの文面で使われることでこの詩全体における虚ろな雰囲気がいよいよ強くなっていると言えるだろう。

この詩においては回想とも言うべき過去と、それに相反する現実、現在が描かれており、最初の 3 連で過去を、最後の 1 連で現在について対比して述べている。最初の 3 連では「私」と「あなた」の 2 人きりの世界が描かれている。私のものはあなたのものであり、一晩中ただ呼吸をし、あなたを感じている。呼吸という生命維持に必要な最低限なものと一緒に「あなたを感じて」おり、加えて「あなたに包まれていた」(Du var runtomkring.) という表現から、「あなた」は「私」にとって酸素にも等しい存在であることが分かる。その後原因は描かれていないが、「あなた」を失った現在について描かれている第 4 連では「私」は「死んだも同然」(livlöst) であり、世界は空虚 (ett väldigt skal) なものだと述べられている。

以上のことから「あなた」(du)がこの詩において、また、詩中の「私」において大変重要であることは明らかであるが、これよりもさらに初期の作品で“du”が詩中において大きな役割を果たしている詩を1篇見つけることができた。ここにその詩を引用したい。

## Morgon

När morgonens sol genom rutan smyger,  
glad och försiktig.  
lik ett barn, som vill överraska  
tidigt, tidigt en festig dag -  
då sträcker jag full av växande jubel  
öppna famnen mot stundande dag -  
ty dagen är du,  
och ljuset är du,  
solen är du,  
och våren är du,  
och hela det vackra, vackra,  
väntande livet är du!

## 朝

朝の太陽が窓を通して忍び込んでくる、  
嬉しそうに恐々と。  
驚かせたがりの子どもと同じように  
祭りの日朝早く、早くに—  
そのとき私は膨れ上がった喜びに満たされる  
近づいてくる日に向かって腕を広げよう—  
なぜなら昼間とはあなたであり、  
そして光とはあなたであり、  
太陽とはあなたであり、  
そして春とはあなたである。  
そして美しい、美しい、  
待っていた命とはまさにあなたのことなのだ！

(出典：Moln, 1922)

(山口祐奈 訳)

上の詩は「私のもの全て…」と比べるとひどく明るい詩であり、比較にはそぐわないように思われるが、どちらも二人称単数の“du”について述べた詩である。より詳しく考察するため、共通項である“du”について抽出した。

「朝」「Morgon」については「なぜなら」(ty)につづくフレーズにおいて「あなた」(du)が提示されている。「あなた」は「昼間」(dagen)「光」(ljuset)「太陽」(solen)「春」(våren)「美しい、待っていた命」(hela det vackra, vackra väntande livet)である。「私のもの全て…」においては「あなた」は「孤独」(ensamhet)「周りにいるもの」(runtomkring)「もう残っていないもの」(där inte du är kvar)である。また、前述の通り酸素にも近い存在であり、生きがいとも言えるべきものであることが読み取れる。

一見すると相反するように見えるこの2つの詩であるが、「朝」では「あなた」がいる(訪れる)人生を朝の光に例えて喜び、「私のもの全て…」では「あなた」のいない(去ってしまった)人生を悲しんでいる。この2篇を関連させてボイエが書いたという事実はないが、ボイ

エの中で“du”がある程度共通するイメージをもつ単語であったことは推察できる。また、どちらの詩においても「あなた」が生命のイメージをもって詠われていることが分かる。このことから、「私のもの全て…」で過去から現在に時が移った第4連の最初の文である“Livlöst är livet”は「死んだも同然の人生」と訳した。筆者の解釈を織り交ぜた上での訳ではあるが、「あなた」が詩中で生命の象徴であることを表したいと考えた。

詩において“du”が一体何ものであるかについては明確に示されていない。当初筆者はこれが一体何を指すのか明らかにしようと考えていたが、“du”が詩中でどういう存在であるのかについて分析していけばいくほど、そうすべきではないと感じた。この“du”が何であるのかに関しては作者であるボイエがあえて読み手である我々に委ねているのではないかと感じたからだ。恋人を思い描く人もいれば、親と子の関係を思い浮かべる人もいるだろう。中には神のような、概念的な存在を思い浮かべる人もいるかもしれない。個々人の人生における“du”を考えながら読むことでこの詩は深みを増し、完成するのだ。

#### 4. 結びに代えて

本稿では「私のもの全て…」を主軸にまったく違う印象を与える2つの詩を取り上げた。「あなた」というモチーフで繋がったこの詩は、共通して生命や人生といったテーマを掲げており、その背景に実存主義の影響を多分に受けているボイエの姿を垣間見ることができる。

また「私のもの全て…」について、筆者はこの詩が炉を意味する単語が題名となっている詩集に所収されていることについて当初違和感を持っていたが、この考察を通じて、「あなた」を通して生命や愛を詠ったこの詩は深い悲しみを感じさせるものでありながらも炉の持つ温かいイメージに合致していることを認識させられた。ボイエは1941年に自殺という形でその生涯を閉じるが、喜びと悲しみに迷うこの詩は彼女の人生を象徴するかのよう感じた。

#### 使用テキスト

Boye, Karin. 1927. *Härdarna*.

Boye, Karin. 1922. *Moln*.

#### 参考資料

Albert Bonniers Förlag. Karin Boye <https://www.albertbonniersforlag.se/forfattare/6668/karin-boye/> (2020年5月17日最終確認)

Litteraturbanken. Karin Boye <https://litteraturbanken.se/författare/BoyeK> (2020年5月17日最終確認)

デュラン, フレデリック. (毛利三彌, 尾崎和郎共訳). 1976. 『北欧文学史』. 東京: 白水社.  
ボイエ, カリン. (富原真弓訳). 2008. 『カロカイン 国家と密告の自白剤』. 東京: みすず  
書房.

Dagsmeja

Morgonluften avlämnade sina brev med frimärken som glödde  
Snön lyste och alla bördor lättade - ett kilo vägde 700 gram inte mer.

Solen fanns högt över isen flygande på stället både varm och kall  
Vinden gick fram sakta som om den sköt en barnvagn framför sig.

Familjerna gick ut, de såg öppen himmel för första gången på länge  
Vi befann oss i första kapitlet av en mycket stark berättelse.

Solskenet fastnade på alla pälsmössor som frömjöl på humlorna  
och solskenet fastnade på namnet V I N T E R och satt kvar där tills vintern var över.

Ett stilleben av timmerstockar på snön gjorde mig tankfull. Jag frågade dem:  
"Följer ni med till min barndom?" De svarade "ja".

Inne bland snåren hördes ett mummel av ord på ett nytt språk:  
vokalerna var blå himmel och konsonanterna var svarta kvistar och det  
talade så sakta över snön.

Men reaplanen nigande i sitt dåns kjolar  
fick tystnaden på jorden att växa i styrka.

## 真昼の雪解け

朝の空気は輝く切手つきの手紙をよこした  
雪は光っていた，そして全ての重荷は軽くなった — 1キロは700グラムもない。

暖かくもあり冷たくもある場所に飛んでいる氷の上高くに太陽はあった  
風は前の乳母車をゆっくり押すように振舞った。

家族は外に出た，彼らは久方ぶりに開けた空を見た  
私達は一つのとても偉大な物語の序章であった。

日差しは蜜蜂についた花粉のように毛皮の帽子すべてにくっつき  
そして「冬」という名前に結び付けられ冬の終わりまで残っていた。

静物画のような雪の上の倒木は私に思考させた。私は尋ねた，  
「私の子供時代までついてくるかい？」彼らは答えた「ええ」と。

茂みの中で新しい言語の眩きが聞こえた  
その言語の母音は青い空，子音は黒い枝だった  
そして雪の上でゆっくりと話した。

しかし騒々しいドレスの膝を曲げてお辞儀した飛行機は  
大地をさらに沈黙させた。

(出典： *Den halvfärdiga himlen*, 1962)

(渡部和泉 訳)



## 1. 作者紹介：Tomas Tranströmer(1931-2015)

詩人であり心理学者でもあったトマス・ユスタ・トランストロメル(Tomas Gösta Tranströmer)は 1931 年 4 月 15 日ストックホルムに生まれた。トランストロメルが三歳の時に両親が離婚し、母親が教師をしていたストックホルムで育つ。青年時代に芸術に関心を持つようになり、音楽は彼にとって必要不可欠なものとなった。ピアノを演奏するようになり、その後間もなく詩に出会う。彼の最初の詩は 1940 年代後期に学生雑誌で出版された。高等学校を修了するとストックホルム大学で文学史や宗教史を学び、その後心理学者となるために学ぶ。1958 年にモニカ・ニー・ブラドと結婚し、二人の娘を持つ。

1954 年にデビュー作である『17 編の詩』*17 dikter* を著して間もなく、トランストロメルはスウェーデンの詩人の代表的な存在と考えられるようになった。鋭く研ぎ澄まされたメタフォリックな表現や、神秘主義的で音楽性に富み、形式に厳格且つ自然な言い回しを好む彼独自のスタイルとその質の高さは、彼の後期の作品に顕著である。

彼の詩は神秘的なものが多く、1958 年の『路上の秘密』*Hemligheter på vägen* や 1962 年の『半ば出来上がりの天国』*Den halvfärdiga himlen*、彼の最終作である、2004 年に著された『大きな謎かけ』*Den stora gåtan* などがその例として挙げられる。

1990 年に脳卒中を患ったことで彼は右半身のまひに苦しみ、話すこともままならなかった。それ以降作品の執筆に多くの時間を費やすようになる。いくつかの作品はその完成のために数年をかけることもあった。彼は生涯の長きにわたって音楽に関心を持っていたが、このことは彼の作品にも表れている。この傾向は脳卒中を患った後にさらに強く見られる。

彼が 1965 年から 2000 年にかけてヴェステルオースに在住していたこともあり、1997 年にはヴェステルオースのコミューンによって、優れた詩を称える Tranströmerpriset(トランストロメル賞)が設立された。

2011 年、80 歳の年にトランストロメルはノーベル文学賞を受賞した。彼の作品は 60 か国語以上の言語に翻訳されている。

トランストロメルは 2015 年 3 月 26 日にストックホルムで亡くなった。

## 2. 詩の分析

### 2.1. 第 1 連

第 1 連における、朝の空気がよこした「輝く切手つきの手紙」が何かであるかは明示されていないが、次の行において「雪は光っていた」という描写があるた

め、どちらも光を放っている点からもこの言葉が象徴するのは雪であると考えられる。冬の朝の澄んだ空気の中で一面に広がる雪の風景を抽象的に表しているといえよう。二行目においては、その雪があらゆるものに降り積もり形を覆い隠したことで、冬の寒々しい風景が華やかに彩られ視覚的な軽さをもたらしたという解釈ができる。

## 2.2. 第2連

第2連の「暖かくもあり冷たくもある場所」もまた解釈の余地のある描写である。「氷」が「飛んでいる」ということから、軒先の氷柱を想像した。太陽に照らされて冷たかった屋根が暖かくなり、垂れ下がる氷柱から雫あるいは氷柱そのものが落ちる様子を表しているのではないだろうか。

## 2.3. 第3連

第3連においては焦点が自然から人間へと移っている。冬の厳しい天候が和らいだことで、人々は久方ぶりに外に出ることができたのだろう。抗うことも叶わないほど大きな自然に対し、人間の小ささを感じつつも自らもまたその一部分であることを実感していることが想像できる。

## 2.4. 第4連

第4連には「蜜蜂についた花粉のような毛皮の帽子」が登場している。ここからこの連が冬の風景を描写していることがわかるが、冬に花が咲いているとは考えにくいこと、また蜜蜂は冬に精力的に活動することはほとんどないことから、この「毛皮の帽子」は文字通りの意味ではなく、何かを象徴していると考えられる。この一文は、蜜蜂の体に花粉がつくように、人間がかぶっている毛皮の帽子に日差しが強く降り注いでいる様子を表していると推測できる。

## 2.5. 第5連

第5連において、なぜ「私」が「静物画のような倒木」に対して呼びかけたのかは定かではない。成長しその命を終えて雪の上に横たわっている倒木を目にすることによって、「私」は自らの過去に思いを馳せたのだろう。

## 2.6. 第6連

第6連の「新しい言語の眩き」とは果たして何であろうか。「母音は青い空、子音は黒い枝」より、言語を構成する母音と子音がどちらも自然に存在するもので

あるという点から、言語は元来自然の中で生まれた風の音や葉擦れの音のようなものであると作者は暗に示しているのかもしれない。あるいは、空を飛び枝で羽を休める鳥の雛が茂みの中で新たに生まれ、小さくさえずっている様子を表現しているとも考えられる。「ゆっくりと話した」のは、舌足らずな幼児の話す言葉のように、「言語」がまだ十分に成熟していないためではないだろうか。

## 2.7. 第7連

第7連は非常に印象的な連である。「飛行機」の「お辞儀」がどのようなものかは具体的にはわからないが、「お辞儀」という動きを意図的に表現していることから、ただ飛行するのではなく旋回、あるいは直進と下降を何度も繰り返す着陸を表していると推測する。「大地」が「沈黙」するのも、飛行機のエンジン音によって地上の音がかき消されたためであろう。第6連で述べたように、茂みの中でさえずる雛がエンジン音に驚いて沈黙したことを表しているとも考えられる。

## 3. まとめ

全体を通して、神秘的なだけでなく、作者の自然に対する観察眼の鋭さを強く感じさせる作品だった。抽象的な表現や整った形式も、芸術に対して大きな魅力を感じていた彼の美的感覚が生み出したものであろう。題名である「真昼の雪解け」は英訳のタイトルを参考にした。ノーベル文学賞を受賞した作家であるにも関わらず、彼の作品のうち日本語訳されたのは1996年の『悲しみのゴンドラ』*Sorgegondolen*のみであった。今回の詩の分析が、彼の神秘的な魅力を持つ数多の作品を読み解く一助となること、また彼の作品だけでなく、より多くのスウェーデンの文学作品が日本においても愛されるようになることを願う。

### 使用テキスト

<http://akvarell.blogspot.com/2011/02/dagsmeja-tomas-transtromer.html> (2020年7月30日最終確認)

### インターネット上の資料

Tomas Tranströmer, Albert Bonniers Förlag.

<https://www.albertbonniersforlag.se/forfattare/5920/tomas-transtromer/> (2020年7月30日最終確認)

Tomas Tranströmer-Biografi, The Nobel Prize in Literature 2011, THE NOBEL PRIZE.

<https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2011/transtromer/25709-biografi/> (2020 年 7 月 30 日 最終確認)

Dagsmeja, Youtube.

[https://www.youtube.com/channel/UCpMQQ1OLXWVg9\\_hvBbJFPxg](https://www.youtube.com/channel/UCpMQQ1OLXWVg9_hvBbJFPxg) (2020 年 7 月 30 日最終確認)

Tomas Tranströmer, Poetry foundation. <https://www.poetryfoundation.org/poets/tomas-transtromer> (2020 年 7 月 30 日 最終確認)

第二部  
卒業論文要約  
デンマーク編



*Forestillingen om et ukompliceret liv med en mand*  
『ある男との平凡な生活についての空想』  
～現代デンマークのミニマルな物語を読む～

デンマーク語専攻 久保田真由

目次

1. はじめに
  2. 作家紹介
    - 2.1. 作家略歴
    - 2.2. 執筆スタイル
      - 2.2.1. ミニマリズム
      - 2.2.2. 作家 Helle Helle と執筆スタイル
  3. 作品紹介
    - 3.1. あらすじ
    - 3.2. 人物相関図
    - 3.3. 先行研究紹介
  4. 登場人物の役割
    - 4.1. 焦点人物
    - 4.2. 周囲の人物
      - 4.2.1. 恋人 Kim
      - 4.2.2. 友人 Ester
      - 4.2.3. その他の登場人物
  5. 物語に用いられるイメージ
    - 5.1. 三つの空想
    - 5.2. 「傘とレンガ」のメタファー
    - 5.3. 物語の始まりと終わり
  6. まとめ
- 使用テキスト  
参考文献  
インターネット上の資料

## 要約

本稿は女性作家 Helle Helle の *Forestillingen om et ukompliceret liv med en mand* 『ある男との平凡な生活についての空想』の原文を分析することによって、小説の中での登場人物の役割を考察し、作者が物語に込めたメッセージに迫るものである。同時に Helle Helle の魅力を日本の読者に伝え、「幸せの国」と言われるデンマークに暮らす人々の生活に焦点を当てる意義がある。

第一章で本論文の意義について述べ、導入とした。第二章では、Helle Helle について紹介した。インタビューを参考に、彼女の人生を簡潔に示し、特徴的な執筆スタイルであるミニマリズムについてまとめた。また彼女は自身の人生経験から得た気づきを執筆活動に活かしている。例えば、彼女の育った地域特有の話し方の一つに、調子はどうか尋ねられると、その時何をしているかを答え、間接的に気分を伝えようとする話し方がある。この話し方は、登場人物の行動や会話のみを描き、心情を間接的に示すミニマリズムの書き方と関連づけられる。またラジオ局での仕事から学んだ、最初の 30 秒間でリスナーの心を掴む大切さを活かし、小説の最初の文に工夫を凝らす。続く第三章で、『ある男との平凡な生活についての空想』のあらすじ、人物相関図を示し、先行研究を紹介した。

第四章から本論に入り、行動描写やセリフを引用しながら、主要な登場人物の性格や物語での役割について考察を行った。主人公で、焦点人物の Susanne は、職場でも日常生活でも孤独を抱え、過ぎるままに毎日生きる女性であると述べた。具体的には、病院の清掃や調理の仕事に従事し、医師や看護師との間にあるお互いにわかり合うことのできない「溝」について読み取ることができる。また個人のアパートの清掃を通して、刺激的な他者の生活を垣間見る Susanne の様子が描かれ、平凡な Susanne の生活を強調する効果があると分析した。Susanne と親しい人物としては、恋人の Kim と友人の Ester のみが登場し、人間関係が希薄であると読み取ることができる。次に恋人 Kim と Susanne の関係について考察を行った。二人は恋人同士でありながら、教養や正しい言葉づかいに関する考え方の違いでよく口論する。Susanne は肉体的で作業的な仕事に従事する一方で、Kim は作家を夢見て頭を使って小説を書いており、対照的な二人の関係性がよく表現されている。次に友人 Ester と Susanne の関係について示した。Ester は Susanne とは対照的に、職場や趣味など外部との繋がり



を大切に過ごしている。Susanne の唯一の友人である Ester だが、Susanne は完全に心を開いておらず、二人のちぐはぐな関係性を読み取ることができる。その他、小説内の特徴的な音や外見の描写についても分析を行った。

第五章で小説に含まれるメタファーについて触れた。まず Susanne が平凡な日常生活の慰めにしている三つの空想について分析した。Susanne は恋人 Kim とともに家族など外部との繋がりを大切に、小説家を目指す Kim の恋人にふさわしい教養を身につけ、アパートの内装に気を使う生活に憧れていると結論づけた。小説全体を通して空想と現実が意図的に混ぜられていて、空想と現実の境界の曖昧さについて読者に訴えかけていると考えた。次に小説の中で重要と思われる「傘とレンガ」のメタファーについて述べた。傘とレンガは材質も用途も異なる異質なもの同士であり、Susanne と恋人 Kim のちぐはぐな関係性をよく表すメタファーである。また傘の「守る」イメージと、レンガの「支える」イメージから、二人はお互いに支え合って生きているということを示唆しているとも言える。さらに物語の最初と最後に同じレンガが登場し、現実世界と小説の世界をうまく繋ぐ効果がある。最後のシーンでは、Susanne と Kim の関係性が最初に比べて改善しており、閉じられたドアを開くストッパーとして描かれる「レンガ」が殻を破った二人の関係を暗示していると分析した。

第六章で論文全体のまとめを述べた。小説全体を通して二項対立と考えられる多くの要素が含まれる。「人との繋がり」と「孤独」、「肉体的、作業的な労働」と「頭や知識を用いる仕事」、「田舎暮らし」と「都会暮らし」、そして「空想と現実」つまり「虚構と現実」と言い換えることもできる。「虚構と現実」が小説の最も大きいテーマだと考えると、この小説は現実と虚構の境界線がますます曖昧となった現代社会に対する問題提起だと捉えることもできる。2000年代以降の新しいリアリズムである新リアリズムは、どのように現実を理解すれば良いのか、現実とは何か、現実と虚構の境界はどこかという問題について読者に質問を投げかける。この小説はミニマリズムの形式で書かれた小説であるだけでなく、新リアリズムのテーマを含む小説であるとも言える。誰でも簡単にメディアを通して自分を発信できるようになった現在、現実と虚構の境界がさらに曖昧となっている。例えばカメラを通した現実は本当に現実だと言えるであろうか。そのような現代社会に生きる私たちに、現実とは何かについて考え直すきっかけを与える小説であると結論づけた。

# 小説家，及び博物館員としての Peter Seeberg を探る

デンマーク語専攻 里見董

## 目次

1. はじめに
2. デンマーク文学における 1960 年代のモダニズム
  - 2.1. 概要
  - 2.2. Peter Seeberg のモダニズム文学
  - 2.3. 作家 Peter Seeberg の立ち位置
2. Peter Seeberg とは何者か？
  - 3.1. 略歴
  - 3.2. 博物館員としての Peter Seeberg
  - 3.3. 作家としての Peter Seeberg
4. 短編小説「患者」("Patienten") の事例研究
  - 4.1. 概要
    - 4.1.1. 作品の成立背景
    - 4.1.2. あらすじ
  - 4.2 内容分析
    - 4.2.1. 人間を実存として捉えること
    - 4.2.2. 人間をものとして捉えること
    - 4.2.3. 考察のまとめ
5. まとめ

使用テキスト

参考文献

## 要約

本論文は、デンマークを代表する小説家の一人であり、博物館員であった Peter Seeberg (1925-1999) の人物像について考察を行ったものである。1960年代のモダニズム文学作家として知られる Seeberg は、作家としてデビューする前から博物館員として活動していたという経歴を持つ。博物館員としての広範囲にわたる活動が、Seeberg の作家活動へのインスピレーションであったとともに、彼の文学界における立ち位置や、作品のスタイルにも影響を与えているとされる。そこで本論文の意義は、Seeberg の経歴や作家活動の展開について、詳しく考察することで、モダニズム時代を生きた特異な作家の全貌を明らかにすることとした。その際、1960年代のモダニズム文学や実存主義的な考え方と関連づけられるとともに、博物館員として「もの」の存在に着目するという視点が見られる短編小説「患者」“Patienten” を取り上げ、事例研究を行った。またこの作品が収録された短編小説集『探索』*Eftersøgningen* は、Seeberg にとって初の短編小説集であり、彼が1960年に Viborg で博物館長に就任したのちの1962年に初めて発表された作品であった。このことから、この作品が書かれた時期は、Seeberg が博物館員と作家の両立について考える上で、重要であったのではないかと考えた。以上のような、本論文における研究目的とその方法を、第一章で示した。

第二章では、デンマークにおける1960年代モダニズム文学の展開と、そうした流れの中での Seeberg の作家活動について述べた。Seeberg は1955年、日刊紙 *Information* が行ったコンテストに、戦後の新しい時代について述べた論文を寄せ、賞を受賞している。また翌年の1956年には、自身が経験した第二次世界大戦を題材として扱った長編小説『脇役たち』で作家としてデビューし、作品の革新的な形式が高く評価された。一方で、Seeberg は文芸界の中心から離れた立ち位置にいた。このことは、彼が博物館員として活動し、独自の制作場所を築いていたためであると指摘されている。

第三章では、博物館員としての Seeberg、作家としての Seeberg にそれぞれ着目しながら、彼の経歴についてまとめた。博物館員 Seeberg は、若い頃の国立博物館での仕事を通して、物事存在に関心を持ち、客観的で正確な記述に基づいた表現方法を獲得していた。また当時のインタビュー記事から、Viborg Stiftsmuseum で博物館長に就任した彼が、博物館員としての活動と、作家活動を両立しようとしていたことを示した。作家 Seeberg の

文学作品は、哲学的な前期の作品から、博物館員としての仕事との境界が曖昧で、「ものの存在」により着目した後期の作品へと展開していくと言われる。このことを、Seeberg が晩年に関わった展示のプロジェクトである「消えるかもしれないもの」“Thing der måske forsvinder” から、彼による詩の形式となったテキストを引用し、確認した。この展示では、新しい技術やライフスタイルが生まれたために、現在は暗く静かで、人目につかない場所にあるものに焦点が当てられている。

第四章では、短編小説「患者」の考察を、人間を実存として捉えるという観点と、人間をものとして捉えるという観点から行った。主人公の私(jeg)は、「ありきたりの壊死」“almindeligt bortfald” と呼ばれる、とても珍しい病気にかかり、入院生活を送っている。医者たちが主人公の病気を促進していたということもあり、私の体は足や腕のみでなく、心臓や頭まですべてが人工の「もの」に置き換えられる。こうした部分から、医者たちは臓器移植という技術を試すための「もの」として、患者である主人公を捉えており、人間が「もの」であるかのように扱われていると考えた。そうした状況の中で主人公は、自身の人生は自分のものなのか、自分は本当に自分自身であるのかを疑問に思う。物語の最後で主人公は、新しく取り替えられた自分の体を、自分のものと感じるようになる。このように、主人公が自身の実存を認められた大きな理由は、妻から自分の存在を認めてもらったことができたということであると考え、自身のアイデンティティとは、周囲の人との関わりから得られるものであるとまとめた。またそうした場面から、人間が「もの」を持つということも、アイデンティティの形成に影響しているのではないかと考えた。そして、人間が「もの」とは究極的に異なるのは、アイデンティティの模索を行うことだと結論づけた。以上のように、Seeberg は博物館員としての視点から、「もの」の存在を中心に扱った物語をも作り出していた一方で、実存主義的な捉え方で、人間の生を考えていたと言えるだろう。

第五章ではこれまでに述べたことを振り返り、まとめを行った。第二次世界大戦後、従来の価値や人間の存在が疑問視される中で、Seeberg は博物館員としての視点を活かしながら、作家として、変化する時代の中での人間と「もの」の存在やそれらの関係を扱い、人々の議論を呼んだ。このことが、現代においても、彼が重要な作家と評価されることにつながっているのではないだろうか。

## 21世紀リアリズム文学として Bent Haller *Skyld* を読む

デンマーク語専攻 菊井彰乃

### 目次

1. はじめに
2. Bent Haller と *Skyld* の成立背景
  - 2.1. 作家 Bent Haller
  - 2.2. *Skyld* の成立背景
3. *Skyld* の作品分析
  - 3.1. *Skyld* のあらすじ
  - 3.2. 主人公と家族関係
    - 3.2.1. 主人公と祖母
    - 3.2.2. 主人公と両親
    - 3.2.3. 主人公と妹
    - 3.2.4. 主人公の変化
4. *Skyld* の考察
  - 4.1. 社会リアリズム性
  - 4.2. 純文学から児童文学へ
5. まとめ
6. 参考文献
  - 使用テキスト
  - 参考資料
  - インターネット資料

## 要約

本論文では、19世紀の古典作品ヘンリック・ポントピタンの「大きな一日」“En stor Dag”を底本として、現代版に翻案したベント・ハラールの作品『誰のせい？』*Skylde*を扱い、ベント・ハラールが『誰のせい？』に込めたメッセージについて考察するものである。

第一章では、本論文の問題提起について概要を述べている。「死」「いじめ」「ネグレクト」などといった社会の暗黒部分を子供向けに発信している『誰のせい？』は、デンマークの現代社会の問題を子供たちにも考えてもらうように工夫されている。物語を考察していく中で、作者が込めたメッセージを読み解いていくことに加え、世界共通であるこの社会問題に対する作者のメッセージを日本に届けることを目標に掲げた。

第二章では、『誰のせい？』の作者であるベント・ハラールの紹介及び『誰のせい？』の成立背景についてまとめている。『誰のせい？』の成立に関して大きな鍵を握っているのは、デンマークを代表する児童文学者のトーベン・ヴァインライヒである。彼がベント・ハラールに「大きな一日」を元に新しい作品を生み出すことを依頼しなければ『誰のせい？』が生まれることはなかった。そのため、学校教育における古典の立場に関する歴史を示しながら、現在彼が問題視している点を明らかにし、ベント・ハラールに作品の制作を依頼するに至るまでの経緯をまとめている。さらに、ここでは「大きな一日」について紹介している。あらすじ及び作者であるヘンリック・ポントピタンについて示すことで、今後本論文の軸となっていくテーマ(自殺、ネグレクトなど)について、共通性を明示している。

第三章では、『誰のせい？』のあらすじを紹介し、分析を行なっている。主人公と彼の周辺の人々との関係を分析していくことで、彼を取り巻く環境がいかなるものかを考察している。実際に作品中の場面を引用しながら細かく分析することで、自殺やネグレクトの問題がどのように悲劇として彼に降りかかるのかを具体的に示すことができている。また、様々な試練に立ち向かっている主人公に焦点を当てることで見えてくる彼の成長についても分析している。いかに苦しい状況においても力強く生き続ける彼の姿は、同様の状況下にいる子供たちの希望の存在になり得る。暗いテーマを扱う中でも、希望の光を届ける作者の狙いだと考えられる。

第四章では、『誰のせい？』の考察を行なっている。「大きな一日」との共通点や差異にも触れながら、『誰のせい？』を子供向け作品

にするために、ベント・ハラールが凝らした工夫を示している。共通項として挙げられるのは「社会リアリズム性」である。『誰のせい？』の中で問題となっている事柄が、実際のデンマークの社会問題となっていることに加え、底本となった「大きな一日」の時代でも同様の問題があったことを示している。また、ベント・ハラールの作風やこれまでの略歴を踏まえた人物像を示し、現代を代表するリアリズム作家である彼こそが、今回のテーマを扱う適任者であったことをまとめている。『誰のせい？』が成立する上で、「大きな一日」との最大の差異としてあげられるのは、対象読者の違いである。この違いにおいて、最も効果を発揮しているのは「語り手」である。『誰のせい？』の語りで特徴的なのは、「一人称の語り」であることと、「信頼できない語り」であることだと明示している。「一人称の語り」が発揮する効果に関しては、実際の場面を引用しながら、読者が語りである主人公に感情移入し、物語の世界観に引き込まれるよう凝らされた工夫について説明している。「信頼できない語り手」が語りを務める効果については、主人公が語っている事実の曖昧さに言及しながら、読者自身が考えなければならない事柄があることを示した。これらの分析を踏まえ、読者が『誰のせい？』の題名になっている”Skyld”のついて考える必要性を示し、このことに気づいてもらうことこそが、作者の狙いだったのだと記した。

第五章では、以上の分析の総括として、小説『誰のせい？』が果たす役割を示している。1つ目は、トーベン・ヴァインライヒが目指していた、古典文学を現代の子供たちに届ける役割である。2つ目は、子供たちに現代の社会問題について考えるきっかけを与える役割である。『誰のせい？』の中で巻き起こる悲惨な出来事が単なるフィクションではなく、子供たちが自分ごととして捉え、向き合う必要性を作者は伝えているのである。これらの問題は世界共通の課題であることに言及しながら、文学の力を用いて社会に訴える声を、日本をはじめとした世界中の人に聞いてほしいとの筆者の願いを込めてまとめとしている。

文化・芸術批評家としてのポウル・ヘニングスン  
—*Klingen* および *Kritisk Revy* での文筆活動からみる  
デンマークモダニズムの幕開けと発展—

デンマーク語専攻 藤原希

目次

1. はじめに
    - 1.1. 研究目的
    - 1.2. 論文要旨
  2. 文化・芸術批評家ポウル・ヘニングスンと当時の時代背景
    - 2.1. 作家略歴
    - 2.2. 当時の時代背景：戦間期のデンマーク
  3. *Klingen* および *Kritisk Revy* におけるヘニングスンの批評文分析と考察
    - 3.1. *Klingen*
      - 3.1.1. 概要説明
      - 3.1.2. 批評文分析と考察
    - 3.2. *Kritisk Revy*
      - 3.2.1. 概要説明
      - 3.2.2. 批評文分析と考察
  4. ヘニングスンの文筆活動からみるデンマークモダニズム
    - 4.1. デンマークモダニズムの幕開け
    - 4.2. ヘニングスンの文化・芸術概念変遷
    - 4.3. デンマークモダニズムの発展と *Klingen*, *Kritisk Revy* への回帰
  5. おわりに
- 使用テキスト  
参考文献  
参考辞書・辞典  
インターネット上の資料



## 要約

ポウル・ヘニングスン(Poul Henningsen, 1894-1967) は 20 世紀デンマークにおいて活躍したデザイナーおよび建築家である。その代表的な作品に照明器具の PH ランプシリーズがあり、デンマークデザインを代表する傑作の一つである。日本においても一般にデザイナーとして彼の名が知られている一方、未だ広く認知されていない一面として、芸術家としての枠を越え、政治から文化まで多岐に亘り批評する文筆家としても積極的に活動していたということがある。彼による批評の焦点はとりわけ文化・芸術観に当てられ、モダニズムの動きが他の主要ヨーロッパ諸国とはやや遅れ、デンマークで高まりを見せ始めた戦間期に国内の芸術家集団が中心となり発行した文芸誌 *Klingen* (『刃』, 1917-1920) でのデビューを皮切りに、「文化・芸術批評家」として本格的な文筆活動を開始した。*Klingen* に引き継ぐ形で自身が創刊した *Kritisk Revy* (『批判的レビュー』, 1926- 1928) では、他の芸術家たちと議論を交わしながら数多くの論説や時事批評を執筆すると同時に、国内における新たな芸術様式を模索し、自身の文化・芸術観も次第に確立していき、デンマークモダニズムの発展において重要な存在となった。

したがって、本稿ではとりわけ「文化・芸術批評家」としてのヘニングスンが戦間期に発行されヘニングスンが文筆活動のスタートを切る場となった二つの文芸誌 *Klingen* および *Kritisk Revy* に関与していったのかに焦点を当て、その批評分析を通して、一般に認知されているデザイナーとしてのヘニングスンとは異なる一面を明らかにすることを主たる目的とした。さらに彼が他の芸術家たちとともに牽引したデンマークモダニズムのその幕開けから発展までを大局的に追うことで、今日のデンマークにおける文化および芸術をより深く理解することを試みた。

各章の概要としてはまず第二章でヘニングスンの経歴および二誌が発行された戦間期という時代背景を明らかにした。

第三章では *Klingen*, *Kritisk Revy* それぞれの概要説明に始まり実際の批評文を引用しながらテキスト分析および考察を行った。ヘニングスンの代表作である PH ランプがそれを知る上で最適の例となるが、他の多くの芸術家たちが従った直感的アプローチではなく、常に科学的そして哲学的根拠に従って物事を捉え、自身の文化・芸術観と突き合わせた上で実践に移す人物であった。そしてその姿勢は今回分析対象とした両文芸誌における批評文からも

十分に読み取ることができた。ヘニングセンは両文芸誌において、当時の芸術家教育を批判し、ル・コルビュジエやバウハウスといった当時のヨーロッパでもてはやされていたモダニズムの動きに警鐘を鳴らし、真の価値を持つ芸術とは何か、自国デンマークに適したモダニズムの形とはどういったものかということについてストレートに自身の意見や見解を述べ、時にはシニカルな言い回しで思想や個人を非難した。とりわけ自国デンマークの国内状況や歴史を特異なものとみなし、その地域性や風土、人びとの日常生活に適した芸術様式の必要性を説き、彼が唱えたこの芸術理論は「デンマーク例外主義」と呼ばれた。他にもレビューや映画の制作にいたるまで、マルチな才能をもったヘニングスンはさまざまな分野で精力的に活動し、保守勢力に対抗し既成の文化・芸術のあり方の革新、国内外の政治的脅威や反文化的脅威への対抗に奔走し、20世紀におけるデンマーク文化・芸術を語る上で外すことのできない人物となった。最期まで自身を機能主義者であることは認めなかったものの、デンマーク例外主義的観点から派生し、デンマークモダニズムの軸を担った芸術理論「有機的機能主義」の確立に多大な影響を与えたことは忘れてはならない。

つづく第四章では、第三章で見られた両誌におけるデンマークモダニズムの先駆け的要素を整理しながら、その幕開けから発展までを両誌刊行後の彼の文化・芸術観の変遷と交えながら紐解いていった。デンマークにおけるモダニズム運動の幕開けは他の主要ヨーロッパ諸国とは約十年程度遅れをとっていたものの、とりわけ家具デザインの分野において1950年代に国際的な成功を収めた。一方でその後徐々にスノビズムの方向へ走り始めていた当時の傾向に対しヘニングスンは警鐘を鳴らし、自身が *Klingen* および *Kritisk Revy* で主張し続けた本来の文化・芸術のあり方へ立ち返る必要性を訴えた。

本稿は *Klingen* よりも *Kritisk Revy* の批評分析に主な重点を置いたが、すでに述べたとおり後者は前者を引き継ぐ形で創刊された文芸誌であり、仮にどちらか片方が欠けるようなことがあれば、デンマークモダニズムひいては近現代デンマークにおける文化・芸術の様相は異なるものになっていたと言っても過言ではない。したがって両文芸誌で決定的な役割を果たしたヘニングスンによる文筆活動の有意性は計り知れないものであると言え、彼がデンマークモダニズムの発展に大きく貢献した重要な人物であったことがわかった。

## 2 人の作家から読み解く北欧神話の変容性と現代的意義

デンマーク語専攻 堀聖我

### 目次

1. はじめに
  2. Villy Sørensen: *RAGNAROK*
    - 2.1. 作家紹介
    - 2.2. 作品概要
  3. Neil Gaiman: *Norse Mythology*
    - 3.1. 作家紹介
    - 3.2. 作品概要
  4. 両作家の作品分析
    - 4.1. 登場人物
    - 4.2. 対立関係の描写
  5. 反映された作家の独自性・時代性
  6. おわりに
- 使用テキスト
- 参考文献
- インターネット資料

## 要約

現在私たちの知る北欧神話の内容は主にエッダに拠るものであり、その物語の大筋はどの文献においてもある程度一致している。最初の巨人ユミルの死体を用いて、神々がユグドラシルを中心とする九つの世界を作り、様々な種族がそれぞれの世界に生き、そしてときに干渉しあう。そして世界は終焉の時ラグナロクを迎えて滅びる運命にある。しかし、もともと口承で伝えられてきた北欧神話には失われた物語が多く存在すると考えられる。そのため後世に再話された北欧神話の中には多少の差異が確認できることがあり、そしてその差異の中に作家のオリジナリティや個性、時代性を読み取ることができるのではないかと筆者は考える。本論文は、人や時代によって受け取り方が変容し、多様な意義を与え得る北欧神話を今日的な視点から考察することで、その魅力の一端を今に伝えることを目的としている。アプローチ法として、時代も国も異なる2人の作家を選び、それぞれの再話した北欧神話を比較分析しながら論を展開する。

第2章では1人目の作家ヴィリ・サアアンスン(Villy Sørensen)の紹介と、彼の再話した北欧神話『ラグナロク』(RAGNAROK)の紹介をした。続く第3章ではもう1人の作家ニール・ゲイマン(Neil Gaiman)の紹介と、彼の北欧神話の再話である『北欧神話』(Norse Mythology)について紹介を行った。

第4章では、登場人物と対立関係の描写という二つの項目に分けて、2人の作家の作品の分析をした。登場人物の項目では、両作家が北欧神話を再話するにあたって、登場人物に与えた役割とその結果もたらされるイメージを比較しながら、2人の作家の意図を分析すべく、主要人物である3人、オーディン、トール、ロキについてまとめた。オーディンに関して、ゲイマンはオーディンに全幅の信頼を置き、彼の善性を徹底して描いているが、サアアンスは不信感をもって完璧な善になりきれないオーディンを描いているといった、対照的な描き方であることを示した。トールに関しては、ゲイマンの描くトールは善なる存在としての神の立場を保っているのに対して、サアアンスの描くトールは善なる神らしからぬ愚かな行動によって神々に災難をもたらし、神の善性を曖昧にする役割を担っていることを示した。ロキに関しては、ゲイマンのロキは原典に忠実で、災難と災難と苦しみを求める欲望こそが全ての原動力であり、単純な悪のトラブル

メーカーである。一方サアアンスンの描くロキは、単に悪を愛するだけではなく、神々への不信感を抱き、公正の神バルドルの中に潜むオーディンへの不信感を煽るという役割と、神と巨人を積極的に調停しようとする役割をも与えられていることを示した。対立関係の描写の項目では、まず神と巨人の対立の陰険の程度が二つの北欧神話の印象を変えていることに言及した。神と巨人の対立の激しいサアアンスンの北欧神話の世界観は暗く、そして二元論への反発という強いメッセージを伝えるために複雑で解釈が難しい。一方ゲイマンの北欧神話は終始明るく描かれており、小さな子供でも楽しめる北欧神話であることを示した。また、神と神同士の対立にも着目し、いくつかのエピソードを通して、ゲイマンの描く北欧神話の中では神々の間に確固たる信頼関係が築かれているのに対して、サアアンスンの場合は神と神同士でさえ互いに不信感を抱いていることを示した。

第5章ではこれまでの分析の結果導くことのできる、2人の作家の独自性と時代性についてまとめた。サアアンスンの目的は、主流である二元論的な北欧神話の解釈に挑戦し、善に内在する悪、悪に内在する善を暴き出し、絶対的線引きの持つ曖昧さや危険性を世間に訴えることであるとまとめた。また、北欧人のアイデンティティともいえる二元論的世界観についても言及した。一方ゲイマンが近年北欧神話を再話した目的は、今という時代を生きるあらゆる人々に現代の言葉で分かりやすく語られた現代的北欧神話を知ってもらうこと、楽しんでもらうことであるとまとめた。ゲイマンは子供でも楽しめるように分かりやすく北欧神話を構成し、ゲームや映画のようなメディアといった現代的特徴にも配慮して再話していることも確認した。以上を踏まえ、北欧神話は異なる語り手によって再話される価値があり、また読者は異なる北欧神話を読む価値があるという結論に至った。今回言及できたのは2つの北欧神話だけだが、過去に再話された多くの北欧神話やこれから先の未来に再話されるであろう北欧神話もまた、それぞれの時代の色を映して彩る鏡であることを筆者は確信している。



## 第二部

### 卒業論文要約

### スウェーデン編





# Astrid Lindgren : 『長くつ下のピッピ』に描かれた子ども像を再考する

スウェーデン語専攻 吉良美祐

## 目次

1. はじめに
  2. 作品紹介
    - 2.1. 作品成立背景, ピッピ以前の児童文学との比較
    - 2.2. あらすじ
  3. 作者紹介
    - 3.1. 作者の生涯
    - 3.2. 子どもの権利保護活動
  4. 『長くつ下のピッピ』に描かれる登場人物
    - 4.1. ピッピとピッピの周辺の子ども
    - 4.2. ピッピとピッピの周辺の大人
    - 4.3. 主体としてのピッピ
  5. スウェーデンと日本における「子ども＝主体」の受容について
    - 5.1. スウェーデンの場合
    - 5.2. 日本の場合
  6. まとめ—今日的意義
- 使用テキスト
- 参考文献
- インターネット上の資料

## 要約

Astrid Lindgren(1907-2002)は、世界中で不動の人気を保つスウェーデンの児童文学作家である。彼女は子どもの視点から物語を描き、130 作以上の児童文学作品を残したことから「子どもの本の女王」と呼ばれた。また、彼女は児童文学以外に、子どもの人権活動などの社会問題においても活躍し、先駆的な存在であった。彼女の代表作である Pippi Långstrump『長くつ下のピッピ』は 1945 年にスウェーデンで出版され、その後 70 年以上経った現在でも人々を魅了し続けている。当作品では、子どもであるピッピに主体性を与えて描いており、理想の子ども像が示されている。しかし初版が出版された当時、子どもの人権についての議論の焦点は子ども本人に当てられていなかった。その後子どもの権利に関する議論は世界的に進んだものの、当作品で示された理想像は未だに達成されていない。

よって本稿では、今後子どもを取り巻く環境の改善を実現させるため、当作品に描かれた「子ども像」を考察した。また、現代では社会全体が急激に変化している。そこで本稿の考察によって、現代の理想の子ども像を更新することも目的としている。

本稿では当作品に描かれた「子ども像」を再考するにあたり、まず作品紹介・作者紹介を通して当作品が出版された背景を明らかにした。次に登場人物の分析から、実際に Lindgren がピッピを通してどのように「子ども＝主体」を描き出したのかを考察した。最後に当作品で描かれた「子ども像」がスウェーデン並びに日本において、どのように受容されてきたのかを明らかにし、まとめとして本稿の今日的意義を述べた。

作品紹介では、『長くつ下のピッピ』は Lindgren が娘の Karin のために即興で作った話が基になっていることを示し、初版が出版される以前の児童文学と比較することによって、当作品が子どもに主体が置かれて描かれているという点において、画期的であったということを明らかにした。続く第 3 章の作者紹介では、作者の生涯を振り返り、Lindgren が児童文学の世界に留まらず現実世界へ影響を与えていたことを述べた。また、彼女の子どもに対する思いをより理解するため、ドイツ書店協会平和賞授賞式とライト・ライブリフッド賞授賞式で行ったスピーチを振り返った。そこでは今後の世界を作っていく子ども達を大人は愛情を持って育てなければならないという強い危機感が感じられた。

第4章では当作品に描かれる登場人物を子ども・大人・ピッピに分けて分析し、登場人物が果たしている役割とピッピの主体性について考察した。物語に登場する子ども達は読者と同じ一般的な子どもであり、ピッピと対照的に描かれている。そのことによってピッピの存在を際立たせ、読者とピッピとの架け橋の役割を担っている。一方で当作品には大人の権威を振りかざす大人が多く描かれている。そのような大人の愚かさをピッピが指摘し、権威が瓦解する様子が喜劇的に描かれている。またピッピの言動を分析することで、ピッピは子どもであっても自分で考えることができ、その考えに基づいた行動を取るという点から主体性があるといえるだろう。第4章を通じて、子どもが主体性を持つことは必要であるが、子どもと大人は同等な能力を持つものではないため、大人と子どもが尊重し合い、相互補完の関係にある世界をLindgrenは描き出しているということが明らかになった。

第5章では当作品並びに当作品で描かれた「子ども像」がスウェーデンと日本においてどのように受容されていったのかを明らかにした。スウェーデンでは当作品によって様々な論争が巻き起こったが、子どもの権利に関する論争を前進させたことは間違いない。賛否両論を受けながらも現在では、ピッピは自己の主体性に関する理想像となり、成長過程に必要な要素として受容されている。また、Lindgrenの主張は社会全体に大きな影響を与え、社会問題の先駆的な人物として受け入れられていることが明らかになった。一方日本では、子どもの主体性を重要視する動きはスウェーデンと比べて遅れていた。当作品が人気を博した後でも、教育現場の子ども観は依然として旧いものであったが、現在では子どもの権利活動の思想が周知されている。子どもの権利活動において当作品が理想像として用いられた例からも、当作品は日本においても子どもの権利に関する先駆的なモデルとして社会に影響を与えていることが窺える。

本稿ではLindgrenが当作品に描いた「子ども像」を考察したが、この理想像は現実社会では達成されていない。急激な国際化・情報化が進む現代社会において、子どもの主体性はより重要である。よって当作品の「子ども像」の根幹である子どもと大人の相互補完の関係は、現代でも応用され得るものであろうと結論付けることが出来た。

Hjalmar Söderberg *Historietter* における表象としての「接吻」  
～同時代の作家・芸術家との比較において～

スウェーデン語専攻 竹内あゆみ

目次

1. はじめに
  2. 作家の生い立ちと人物像
  3. 作品分析
    - 3.1. 『毛皮』作品あらすじ
      - 3.1.1. 『毛皮』作品分析
    - 3.2. 『煙突掃除屋の奥さん』作品あらすじ
      - 3.2.1. 『煙突掃除屋の奥さん』作品分析
    - 3.3. 『罪の報い』作品あらすじ
      - 3.3.1. 『罪の報い』作品分析
    - 3.4. 三作品のまとめと共通点
  4. 同時代の作家・芸術家の作品に用いられた「接吻」の表象
    - 4.1. クリムトの「接吻」
    - 4.2. ムンクの「接吻」
    - 4.3. 夏目漱石の「接吻」
  5. まとめ
- 使用テキスト
- 参考文献

## 要約

ヤールマール・スーデルバリ (Hjalmar Söderberg, 1869 - 1941) はスウェーデンのジャーナリスト、翻訳家、小説家である。彼は19世紀末の所謂「世紀末ウィーン」と呼ばれる時代に生き、その生涯において小説だけでなく戯曲や宗教書など多岐にわたる文学作品を残した。

本稿はスーデルバリ研究の第一人者 Bure Holmbäck 氏の「スーデルバリの作品には“接吻”のモチーフが散見され、いくつかの接吻の物語は悲劇的な結末に向かう」という記述に端を発しており、スーデルバリの短編集 *Historietter* を用いて、世紀末時代の芸術家との比較において「接吻」表象が「悲恋」や「死」などの悲劇的な結末に向かう一定の傾向を見出すことを目的としている。

第一章においては「接吻」という単語の辞書的な意味に触れつつ、本稿で扱う「接吻」を「性愛としての接吻」と定義した。まず「接吻」表象を取り上げた有名な芸術作品としてクリムトの『接吻』を取り上げ、同じく世紀末時代に生き、「接吻」表象を好んで用いたとされるノルウェー人画家のムンク、日本人作家の夏目漱石も比較対象として検討していくことを示した。

続く第二章においてはヤールマール・スーデルバリという人物について主に *Litteratur Banken* の記述からその人物像や作品全体に共通するテーマを紐解いていく。学生時代のスーデルバリや、彼が好んだ作家について触れ、それらが彼の人格形成や作風にどのように影響を与えたのかについて考察した。

第三章では短編集 *Historietter* に収録される「毛皮」“Pälsen”，「煙突掃除屋の奥さん」“Sotarfrun”，「罪の報い」“Syndens lön” の作品分析を行い、三作品の共通点を導いた上でスーデルバリ作品における「接吻」表象には「人は自らの運命を選ぶことが出来ない」という共通テーマが見られると分析した。

第四章ではスーデルバリと同じく世紀末時代に生きた芸術家たちの作品を分析し、彼らがどのように「接吻」表象を扱ったのか、どのような意味を持たせたのかについて考察する。クリムトの章では中山功氏による『美術の中の接吻』(2004)に依拠して、絵画『接吻』の分析において『ベートーベン・

フリーズ』という前身の作品に焦点を当てた。この作品はベートーベンの『交響曲第九番』及び『歓喜の歌』から着想を得ている。クリムトは『歓喜の歌』に込められた民衆の高揚感に、中世騎士道物語の要素を加え、男女の抱擁を最終場面に描いたことが分かった。また、ムンクの章では『接吻』はムンクの自伝的作品であるという論を示すと共にムンクの生涯や彼の「愛」や「死」への価値観や彼の「接吻」表象に付き纏う仄暗さについて考察した。そして世紀末時代の日本ではどのように「接吻」表象が描かれたのか考察するために、夏目漱石について検討した。漱石はイギリスへの留学経験からヨーロッパ文化の影響を強く受けており、アーサー王伝説を題材とした作品を執筆するなどしていた。しかし、漱石は自身の作品においてヨーロッパ文化をただ模倣するのではなく、彼独自の美意識を表現しており、殊に「接吻」表象の描き方には強いこだわりがあったことが分かった。

最終章の第五章ではスーデルバリ、クリムト、ムンク、夏目漱石らが表現した各々の「接吻」表象の相違点を述べ、当時流行していたデカダンスの影響やヨーロッパ地域で長らく親しまれてきた中世騎士道物語の影響を改めて指摘した。そして芸術家たちが近代化によって疲弊していく人間や疫病の流行などの中に漠然とした不安を見たことを推察し、「接吻」表象の中に彼らが各々の人生において経験した挫折や死といったテーマを織り込み、結果として悲劇的な「接吻」として描くことを当時好んだのではないかと結論付けた。

ペール・ラーゲルクヴィスト『こびと』を読む  
—語り部“小人”を軸に—

スウェーデン語専攻 山口祐奈

目次

1. はじめに
  - 1.1. 問題提起
  - 1.2. 論文要旨
2. 作品背景
  - 2.1. 作者ラーゲルクヴィストの人生とその代表作
  - 2.2. ラーゲルクヴィストの作風，傾向
3. 本論，『こびと』について
  - 3.1. あらすじ
  - 3.2. 作品分析
    - 3.2.1. 登場人物
    - 3.2.2. 信仰とそれに関連するモチーフ
    - 3.2.3. 大公と小人
    - 3.2.4. 小人の正体
4. まとめ
5. 使用テキスト，参考文献

## 要約

ペール・ファビアン・ラーゲルクヴィスト (Pär Fabian Lagerkvist, 1891-1974) は『バラバ』 *Barabbas* でノーベル文学賞を受賞した世界的にも高名な作家である。ラーゲルクヴィストの作品は文体や文法は無駄をそぎ落とした簡素なものである一方で、作品のテーマは自己や神の探求という難解なものである。そのためか、特に日本において、彼の代表作『バラバ』以外の他の作品に関しては研究があまり進んでいない。本論文はラーゲルクヴィストと彼の作品に対する研究をより多角的なものにするべく、日本で研究があまり進んでいない『こびと』を扱い、作品の根底にあるラーゲルクヴィストの考えや『こびと』において重要な存在である小人がどういった存在なのかについて考察していく。

第二章では当時の時代背景にも触れながらペール・ラーゲルクヴィストの人生とその代表作、また作風について紹介する。19世紀の終わりに生まれたラーゲルクヴィストは幼少期や青年期に時代の変化を目の当たりにした。ノルウェーとの連合の終焉、工業化やそれによって旧来の価値観が崩壊する様はラーゲルクヴィストを葛藤させた。この古いものと新しいもの、モダニズム、そして神やキリストに対する葛藤がラーゲルクヴィストを世界的作家たらしめたのである。『こびと』に関して言えば、この作品は1944年に出版されたものである。当時は世界中が第一次、第二次世界大戦によって混迷していた。作中登場する戦争の場面からも世界大戦が『こびと』に影響を与えているは明らかである。『こびと』で世界的に成功し、1951年に『バラバ』でノーベル文学賞を受賞したラーゲルクヴィストであるが、彼の創作物の根底にあるものはその時代の影響をそのときどきで受けつつもあくまでも一貫している。彼は葛藤しながらも信仰などの自己の起源について生涯をかけて探求し、作品を生み出し続けたのである。

本論にあたる第三章ではあらすじを簡単に述べた後、『こびと』を四つの観点から分析する。登場人物の項目においては彼らが神やキリスト、人間が内包する残酷さを様々なエピソードでもって表象しているということを指摘した。ラーゲルクヴィストは自己の考えを表現するために彼らにそういった役割を与えたのである。次に、作品で最も重要なテーマの一つである“信仰”と、作品の中の出来事の多くがこの



“信仰”に関連付けられていることに注目した。一見信仰という行為とは無関係なように思われる戦争や病気といったモチーフも小人独特の感性から非日常化され、根底で信仰と繋がっていることが読者に示される。それによってラーゲルクヴィストは「人間は信仰を蔑ろにしているのではないか」という疑いを提示しているのである。

以上のことを素地として物語の語り部である小人について、大公と小人の関係性を作中の場面やユング心理学のペルソナとかげという考えに基づきながら考察した。小人は大公が持っている悪感情の表象である。また、小人がそれを読者に示すことで作中の人物たちの大公への盲従がより明らかに示される。それと同時に小人はあくまでも人間ではないことは作中の表現からも明らかである。そこで、この小人とは一体何ものなのか、小人の正体の項目でラーゲルクヴィストの他の作品に登場する“人ではない”存在にもヒントを求めながら考察した。世界シンボル大事典に依れば小人とはもともと邪悪なイメージを持つ。作中、これが人間から生まれるということも併せると小人という存在は人類の悪感情が表面化した存在だと考えられるのではないだろうか。また、作中で小人はキリストと正反対でありながらも関連づけられて描かれている。人に見下されている小人が実のところキリストと関連があるというのは、私たち人間の盲目さが批判されているばかりではなく、作者のキリスト像がいかに特殊なものであるかを示している。小人はその独特で悪意に満ちた感性で様々なものを非日常化する。そのことによって彼は私たち読者が普段当たり前のものとしていることの本質を暴き出している。以上のことより、小人はその特殊な存在感をもってラーゲルクヴィストの持つ疑念を私たち読者に示すという役割を持っているといえるだろう。

以上の考察によって、『こびと』という作品の根底には人間の愚かさや身勝手さへの批判と信仰に対する葛藤があることが明らかになった。

ムーミン一家の機能不全とその解決  
『ムーミンパパ海へいく』を通して

スウェーデン語専攻 渡部和泉

目次

1. はじめに
    - 1.1. 研究意義
    - 1.2. 論文要旨
  2. 作家紹介
    - 2.1. 作者トーベ・ヤンソンの生涯
    - 2.2. トーベ・ヤンソンの家族観
  3. 作品分析
    - 3.1. あらすじ
    - 3.2. 『ムーミンパパ海へいく』における登場人物の分析
    - 3.3. 作品に表れるモチーフの分析
    - 3.4. 他作品（『小さなトロールと大きな洪水』や『ムーミン谷の彗星』など）における家族像
  4. まとめ
- 使用テキスト  
参考文献

## 要約

本論文はスウェーデン系フィンランド人作家トーベ・ヤンソンが著した、ムーミンシリーズ第8作目の小説である『ムーミンパパ海へいく』（原題 *Pappan och havet*）におけるムーミン一家の機能不全とその解決について、作者の家族観や作品における表現やメタファーの観点から分析を行ったものである。

第1章においては、本稿の論旨および研究意義について述べた。

第2章においては、作者トーベ・ヤンソンの生涯と彼女が持っていたと考えられる家族観について論述した。

第3章においては、『ムーミンパパ海へいく』のあらすじを要約した上で、登場人物の描写や繰り返し現れるメタファー、そして身体的リズムや時間の共有など、言語を介在しないコミュニケーションについても分析し、ムーミンシリーズ初期の作品と比較して、『ムーミンパパ海へいく』が家族の機能不全と、登場人物の心境の変化が主題となった作品であることを明らかにした。

最終章4章では、個人の外側に家族というコミュニティがあり、その外側に他者が存在しているという構造を再確認したのち、以上の考察と分析から、『ムーミンパパ海へいく』においてムーミン一家は、個人と家族あるいは個人と他者とを結ぶ対話によって、互いへの理解を深め、外界の存在と心を通わせることができたことで、家族それぞれのアイデンティティが変化し、不和の解決につながったことを結論として導き出した。